
bullets

独りの少女の弾丸たち

S C T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

bullets

独りの少女の弾丸たち

【NZコード】

N6044M

【作者名】

SCT

【あらすじ】

人を殺したことのない殺し屋、御凪れいと彼女を取り巻く人々の
儚く強かな物語。

有北真那、K、消炭灰介、桜色紅葉、

新城高生、ポペが才筆をふるつ リレー小説ここに開幕。

死後の世界があつたとして、
私はぜつたい天国にいけない。

そう言って、

人を殺したことのない殺し屋は笑つたんだ。

「や、今日は危なかつたね」

御凪れいは苦笑いながらそう言つ。

女性にしてはそこそこの身長と腰まで届く黒くつややかな髪。沈思黙考する姿は間違いなく大和撫子の部類に入るのだが、浅葱色のセーラー服の上から羽織つた着古されたトレンチコートという彼女には不相応な出で立ちがいかにも御凪れいという人間の一端を表している。

「そう思うんなら自分も持つてくださいよ、コレ」
れいの傍に佇むブレザー姿の小柄な青年、火村源二はその場にしやがみこむと、足元の死体の手から拳銃トカレフを拾う。弾倉マガジンを抜き、スライドを引いて薬室を空にしてかられいへと投げる。

れいはそれを受け取るとスライドを数センチ引いて弄ぶ。

「こんなものはいらないさ、言つているだろ？ 私にとつての銃はおまえたちだ、おまえが私のそばにいる限り私にこんなものは不要だ」

れいは言葉を切る。源二の視線を見て少し逡巡するそぶりを見せてから言葉を続ける。

「自分の手を汚したくないわけではない。今更そんなこと言える立場じゃないしな、言つただろお前は私の武器だ。おまえは私の命令により人を殺す。それは武器であるお前の罪ではなく使用者である

私の罪だ。わかつたな

源三に背を向け、れいは言いながら数歩遠ざかる。そして、

「ああ、でも……」

と、振り返つて言ひ。

「銃刀法違反でパクらても私は知らないから」

すこし困ったような笑顔で言つのだから、源三は口を閉じて曖昧に笑うしかなかつた。

「それに、こんな連中から私を守れないほどおまえは軟弱なのか？」

こちらは首を振つて一応の抵抗を見せる。

「はいはい。ケータイなつてますよ」

れいは「一トの懐から携帯電話を取り出すと耳に当てる。十数秒、電話機に耳を傾けた後、

「ん、わかつた」

言つて、携帯電話をしまつと同時にから今度は無線機を取り出す。

「あー、聞こえるかー」

れいは当然の「ごとく返事を待たずに命令を下す。

「一村、四季、打ち合わせどおりにやるぞ、開始のタイミングはおまえたちに任せる」

「どうしました？」

源三の問に、れいは唇を引き結んだまま笑つて見せる。

「歓迎会だ。源三、おまえも配置につけ

「りょーかい」

「よつこそ、一之瀬享一くん？ 私は御風れい、歓迎するよ

都心から外れてしまえばあたりには木と草しかなく、バスが来ないバス停で三時間ほど待たされた一之瀬享一はベンチに腰掛けたまま見上げる。

無造作に伸ばされた黒髪から覗く視線を受けつつれいは手を差し出す。

斜め上から差し出された手を享一は座ったまま受け取る。堅く握られた二つの手は二人の目が合つと、離された。

「さつそくだが任務だ」

背を向けて山道へと歩き出す。れいの後に続こうと享一は立ち上がり、学ランを羽織り直す。立てかけてあつた猟銃を取り、歩き出す。

「とりあえず、ソレじゃダメだからコレを使ってくれ」

歩きながら渡されたのは、ベースケースから出された、スコープ標準機とバイポット一脚が装着済みの狙撃銃。

代わりに享一が持ってきた、猟銃はレミントンが入っていたベースケースへと収納される。

「人を撃つたことは？」

「ない」

享一は生い茂る草を分け、れいの背中に話しかける。

「まあ、鹿や猪を狩るのに大差ないさ、ひとつ違うとしたら、向こうも撃つてくるってことだけかな」

れいは振り返り、享一の顔色を窺うと、また前を向き草木を手で搔き分けながら前へ進む。

「まあ。そちらへんは慣れだからさ、最初のほうは私がサポートするよ」

れいは肩越しに親指を立ててみせる。

「なにぶん、この国には銃を扱ったことのある人が少なくてね、君みたいなのは貴重な人材なんだ」

「金持ちの道楽だ」

「フフ、そう言うな」

享一はれいが押しのけた反動で戻ってきた木の幹を片手でいなすとれいに追いつこうと少し歩幅を広げる。

「狩猟の経験があるなら山道は歩きなれているだろう?」

言葉を一端切り、れいはフフと意味深に笑いを漏らす。

「逆に市街戦は不得意かと思つてね、今日は君の入部試験も兼ねて、君の得意な作戦を選んだ」

れいは立ち止まると振り返らず、言葉を続ける。

「任務の内容は簡単。私が指示する目標を一人、殺してほしい」

狙撃地点はここだとれいは人差し指の先を地面に落とす。

少し勾配のある、適度に生い茂った山の中腹地点は目標を見つけるに易く、発見されづらく狙撃には好都合だ。

「まあ、君には一番簡単な作業であり一番難しい仕事になるかな？……って、うおーー！ なに！ なにしてくれちゃつてんの！」

享一はれいの話しそつちのけで先ほど手渡された狙撃銃いじりにお熱だつた。

「特にそつち、そのスコープ！ けつ！」お値段張るんだよ？！

「じゃまだし」

外した照準機と一脚を享一は地面へと無造作に落とす。。

「じゃまだしつて今日はあそこを狙つてもらおうと思つたんだけど！」

れいは指差す先、おおよそ400メートル先、森から少しはみ出た国道は、たしかに肉眼での確認は難しい。

「大丈夫だ。仕事はする」

無造作に伸ばされた髪の間から覗く、享一の端正な顔立が笑みの形に少しうがむ。

その場に方膝を立てると享一は照準を覗く。

「おい」

享一は照準から目を逸らさずに、手短に、隣に佇むれいを呼ぶ。

「なに？」

「本当に手前の通りに目標はでるんだよな」

「もちろん、私の優秀な部下が陽動しているからね、心配は無用！ 必ず現れるよ」

れいは少し胸をそらして、自慢げに言ひ。

「……」

「だ、大丈夫だからそんな目で見ないで、こんな山奥までわざわざ陽動するのは、街中だと目立つし、まあ、目立たない方法もあるんだけど……。言つたでしょ？ 今日は一之瀬くんの試験も兼ねてるつて、私の目に狂いがなかつたつて証明してもらわないと」

「……じゃあ、あれはなんだ？」

れいは先ほど享一が外したレミントンの照準機を拾つて、覗き込む。享一の銃の先、800メートルほどのところの茂みの中で目標の少女が走っているのが見えた。

「あれ？」

「……」

享一は目を細める。れいの表情に冷たいものが宿つた。

「目標だ、撃て」

今度は照準から顔を逸らして、れいを見る。前髪の奥から覗く瞳が真丸に開く。

その顔に浮かぶのは疑惑。

「大丈夫だ、君は私が選んだ数少ない人間だ。選んだのはそれなりの理由があるし、ターゲット選ばれるだけのものを君は持つていい。私は信じているよ、たとえ目標が既知の、いたいけな少女でも」

「大丈夫だ……仕事はする」

れいの言葉をさえぎつた享一は既に再び照準サイトを覗いていた。

「フフ」

それを見たれいは意味深に笑う。

瞬間。鳴り響く轟音、享一が引き金を引いた。しかし、弾丸は大きく逸れる。

一発、また一発と無駄な弾薬が消費されてゆく。

「おい」

耐え切れず、れいは声をとがらせる。

「所詮弾なんてまっすぐ飛ばないんだ、今でレミントンのコシはつかんだ。次は確実に」

「

享一は、長く、息を吸つて吐く。
「殺す」

そして、引き金は引かれた。

どうも、消炭灰介です

このたびはリレー小説『bullets』独りの少女の弾丸たち』トップバッターを務めさせていただきました。

他のみなさんのお言葉に甘えて、自由に、趣味満載な小説となつております。ダサいタイトルも消炭が考えました。ええそうです。責めるなら私を責めてください。

今回は次の人気が存分に暴れられるように少し背景描写や心理描写を減らしてみました（消炭の実力が無い言い訳です）結構ラストも設定も余白を残しているので次にどんなのが上がつてくるかが楽しみでしかたありません。果たしてこの消炭灰介趣味満載ワールドについてこられる猛者はいるのでしょうか？

次の執筆者は有北真那さんです。楽しみにして待っていてください。

02・ほら、人生なんて良い事ばかりじゃない

?

太陽が山の頂上に差し掛かり綺麗な夕焼けを生み出している。鮮やかなオレンジがこの世界を包んでいる。きっと大半の人間はこの空を見ては”綺麗だ”とか言って心を震わせるのだろう。だが私達は……少なくとも私は、私の心にはそんな余裕は存在しない。

私の名前は近江鈴蘭、推定10歳。一番古い記憶はゴミ捨て場で泣いてること。親に捨てられたらしい私は泥棒稼業の近江一家に盗まれた。だから物心つく頃から盗みをしていて、今では若旦那の義光さんと肩を並べる程だ。でもこの前盗みに入つた城みたいな家はさすがに失敗するかと思った。名前はたしか……み……み、御凧？（ブオオオーー）

横を一台のトラックが追い抜いた。今日は隣街で財布をいくつかくすねてきた。今は帰り道の途中、森の中の国道。子供の体にはけつこうな距離だ。

「すみません。」

黄色いヘルメットを深々と被る工事の人声を掛けってきた。

「この先ちょっと工事中なんで通れないんですよ。遠回りになるかもしれませんが、こっちの道をお願いします。」

子供の私にもなんて丁寧な人だろう。可愛らしく返事をして促された道を進むことにした。

「……工事？」

私は立ち止まつて考えた。朝来た時は工事なんてなかつたはず……。振り返つて工事の人を見た。ヘルメットを脱ぎ捨て煙草を吸っている。あの顔は見たことがある。高校生にして殺し屋の一人、二村透（とおり）だ！じゃあ、このままこの道を行つたら……？

「ターゲットは私なのね。」

護身用に渡されていたナイフを内ポケットから取り出し、両手で握り締め走つた。

(ずふふ)

刃は衣類、皮膚を簡単に通過し、肉を裂き、骨を砕き、刃先は臓器の内部で止まつた。引き裂かれた血管から血が溢れだす。ナイフを伝つて私の手は生暖かさを感じた。

「あ…………ぐふつ。」

一村は口から血を吐き出し、その場に崩れ落ちた。

私はナイフを森の奥に放り投げ、工事中と言われた道を走つた。人を殺したのは、一度目だ。

「ハア、ハア…………！」

しばらく走ると道は無くなり茂みになつた。夢中でいたせいで道を間違えたようだ。私はそれでも進んだ。草や枝を搔き分け、ただただ進んだ。

(バーン！バーン！)

銃声が数回鳴り響く。木々が騒つき、それまで氣配の無かつた動物達が動き出し、鳥が不気味な鳴き声と共に飛び立つ。

私は命の危険を感じた。きっと一村の仲間だらう。どうすればいい、私はまだ、まだ死ぬわけには…………！

(バーン！！)

「これでいいか？」

享一は銃口から立ち上る白煙を吹き消してから言つた。

「さすがは私が選んだ男だ。…………つと。」

無線から声がするのに気付いたれいはポケットからそれを取り出した。

「お姉様、大変です！透君がへマしました！」

「この声は四季だ。

「大丈夫よ、一之瀬君が……。」

「そーじやないんです！あの女の子に刺されて瀕死なんです！」

四季はれいの言葉を遮つて叫び続けた。

「早く吾郎君を呼ばないと死んじやいますーー！」

……どうやら第一話にして武器が1人いなくなりそうだ。

「お話をたーんと聞いてるわよーー！」

無線からオカマ声がする。田比野吾郎だ。

「車飛ばしてそつち向かつてるからあ、四季ちゃん止血だけしついでー！」

れいは視線に気付いた。享一に冷たい目で見られている。“優秀な部下つてどいつだ？”そんな目をしている。

「私と一之瀬君は先に帰るから後始末よろしくね。」

「一之瀬きゅーん！私吾郎よう！早く貴男に会い……ブツン！」

れいは無線の電源を切つた。気まずい沈黙が流れる。

「と、とりあえず他の人達の紹介はまた今度するから、今日は帰るわよー！」

れいは照準機と一脚を手に、来た道を戻ることにした。

800メートル先の標的を照準機なしでその額を貫くとは、良い武器を手に入れたものだ。

「帰るつて、どこにだ？」

享一は前髪を搔き上げながら聞いてきた。鼻筋が通り、二重で茶色い瞳。整った顔立ちは間違いなく吾郎の好みだ。

「ふふ、とにかく私についてくるがいい。」

「透君、死んじや駄目よー透君ーー」

四季は必死に傷口を押さえるが出血は止まらず、地面の赤はその領域を広げていく。

「四季ちゅああ——ん——！」村さゆうう——ん——！」

吾郎が車の窓から顔を出し、手を振りながら叫んでいる。

「吾郎君、早く……！」

四季が吾郎の存在に気付き、そつちに田をやつた次の瞬間……。

(ドォオオ——ン——)

吾郎の車は爆発した。

02・ほら、人生なんて良い事ばかりじゃない ？（後書き）

活動報告も更新しました。そっちもよろしくです。なんか……話
壊し過ぎてゴメンナサイ（*^-^*）
from・真那

車は未だ煌々と燃え続けていた。人の焼ける嫌な臭いが鼻を突く。半ば呆然としている四季の横を、一村を乗せた救急車が走り去る。車体には赤い文字で”松本市消防本部 丸の内署”と書かれていた。つまり普通の救急車だ。

もつとも、彼女達の救急車など存在しない。というよりも、つい先程消し飛ばされた。

四季は近くの鉄パイプを取り上げ、車からはみ出た五郎の手を押し込んだ。こうなつた以上仕方がない。それがれいの判断だった。ここにはまもなく救急隊が呼んだ消防と警察が到着する。何一つとして”証拠”を残さないために、仲間として非常な行動に出るしかなかつた。

よつて、彼女にはまだ仕事が残つていた。それはまず、この場の証拠、遺留品を全て消し自分もいなくなること。そして、搬送された病院に生き、治療の終わった一村を奪還すること。その二つが。

-松本市 某山中地下壕 -

松本市の中心部から、西におよそ20kmの山の中腹に、地下壕の入り口がある。

入り口の前には、擬装された軽装甲機動車が一台停まっていた。上部に設置されたMINIMIが、光学カメラと赤外線カメラを使い、フルオートで絶えず動くものに照準を合わせる。

その間を通り三人は地下壕に入つて行つた。

「ここが…」

享一が無機質な声で尋ねる。

「うーん…まあ私達の秘密基地つてとこね…フフッ…いいとこでし

よ？」

「趣味が悪いな…」

享一は気を遣うことなく、バツサリと言い捨てた。源三は苦笑いしたが、れいは対照的に感心したような顔つきをした。

享一はさらに一三歩進むと何かを拾い上げた。

「この懐中時計もそうだ…見る、菊の御紋がついてる…所謂、恩賜の品つてやつだろ？…つまりここのは旧帝国軍の施設跡…まったく、趣味も縁起も最悪だ…」つていうか、また俺のことを試したな？」

享一は半笑いで探るような視線を、源三は口を半開きで驚いたような視線をれいに投げ掛けた。

れいは優しい笑みを浮かべて、パチパチと手を叩いた。

「正解よ。さすがは平成のシャーロック・ホームズってとこね。」

「そんな通り名聞いたことないがな…」

「当たり前じやない。私がたつた今考えたんだもん。」

れいは舌をチラッと覗かせおどけてみせた。それに享一は肩を竦めておどけて返す。

端で見ていた源三は気が合つたな、と思つたが口には出さないでおいた。人を見る目には自信があった。

「まあ、確かに縁起は最悪かもしれないけど、居住性、収納性、隠密性、防衛性…と、どれをとっても最高なのよ。さすがは本土決戦に備えただけのことはあるわね。」

ちなみに出入口は裏にもあって、その先にはガンシップ化したUH-1Jがいるわ。TOWとM2くつつけた超強力型よ。」

爛々と目を輝かせるれいを見て、享一はミリオタなのか？と思つたが口には出さないでおいた。世渡りには自信があった。

しばらく歩いていると、賑やかな人の声が聞こえてきた。享一は意とせず力む。汗ばむ手で腰のベレッタのグリップを握つた。

「大丈夫よ。あれは味方の声。心配しないで。それより大丈夫じゃないのは君…」

れいは細い人差し指でベレッタを弾いた。

「何か持つてゐるなら言つてよね、ビックリするじゃない。個人の過去以外秘密は無し。それがここルールよ。」

れいは無い胸を一生懸命張つた。

「わかつた……じゃあ、後少々クナイを忍ばせている…」

「クナイつて…」

「クナイは万能だ。短剣にも、飛び道具にも、スコップにもなる。この前は火もつけられた！」

初めて声に熱がこつた享一を見て、れいは忍者か？と思つたが口には出さないでおいた。バカに思われそうだったからだ。

「ハイハイ、わかりましたあ。ほら次の部屋よ皆がいるのは。」
そういうながら部屋に入ると、中には数名の男女がいた。誰もかれも高校生ぐらいの幼い顔つきだが、目が異様に据わっている。異種への拒否反応というよりは、そういう「目に」変えられてしまつた”そんな印象を享一は受けた。

「ハイ、皆注目…してゐよね。うん、えつと…彼が新入りの一ノ瀬享一君。

で、今日全員はいないけど、とりあえずここにいる人だけ紹介するわ。ま…」

「要塞でれいの美声は更に透き通るよつに響き渡つていた。

「今そこで銃火器の手入れをしている一人が六条ゆりと藤野七弥よ
れいがあごで部屋の左端にある木製テーブルの方をクイクイと示す
と享一もそれにあわせて視線を向ける。

そこには黒のセーラー服に身を包んだ女子と詰襟を着崩さず着てい
る青年が小型のベレッタM92をフィールドストリップしていたり、
大型の狙撃銃を磨きながら享一にやはりどこか色を失つた目を向け
ていた。

そして一人は少しだけおじぎのつもりだろうか、首を縦に振り、ま
た銃へと視線を落としてそれらの調整を再開しだす。

享一はそのまま一人から視線を離せずにいると、

「まああの一人は集中し出すといつもあんなるから。喋る時は喋る
けどさ。ゆりなんかは今と違つていつも寝てるんだ、フフッ。でも
二人とも仕事を頼めばきちんとこなしてくれるし、とても重宝して
る。」

とれいが説明を付け足す。

「ふーん」

その言葉を享一はそれとなく聞いていると、

「で、さつきから私のそばにいるのが火村源三。なんでもこなせる

私の右腕だ

享一が先程から気になつて仕方なかつた人物がやつと紹介された。だがその自信に満ちたれいの言い方からは一人の間にある並々ならぬ信頼といつものが感じ取られた。

「よろしくな

と源三は右腕を差し出してきたのでそれに応えて享一も同じ右腕で応えた。

「あと他には……」

とれいが言つた時彼女のポケットからピッピッと無線の着信を知らせる電子音がこの要塞空間に鳴り響いた。

彼女は急いで無線を取り出し焦つた声で応答する。

「ひづら、れい……

なんとか消防や警察の到着前に四季は五郎を燃え盛る車からひきづりだし、証拠となるものが全て燃え尽きてるのを確認してから茂みの中で死体処理用に携帯している特別製のポリ袋の中へなんとかその焼け焦げた体を押し込んだ。

「五郎くん……」「めんね……」

そう呟いた四季は立ち止まりそうになつた時いつも明るく話を聞いてくれた五郎を想い出していた。
だが目の前にある彼の無惨な姿と彼を処理しなければならない自分の使命から胸が苦しくなり、彼女の臉から溢れ出る涙は絶えず頬を濡らしていた。

事前に監視とチエックしておいたこの山で警察の管轄外となつている“安全地帯”までの草が覆い茂る道を数キロに渡り、歯を食いしばり袋をひきひきひきつづ運ぶ四季。

どこまで行つても続く残酷なまでに広がる緑やたかってくる様々な虫たちは彼女の心を今にも折ろうとしていた。

そうして何時間経つたかわからぬが、みづちへ目的地に近づいた四季は体中ボロボロになり、力竭きて膝から崩れ落する。

『もつ……限界だよ……でも五郎くんを埋めるまで……一村くんを助けに行くまで……最後まで私がやらなきやー』

そう思って立ち上がりつとめる四季は顔を上げる。

すると視線の先にはそつと手を差し延べる男の姿があった。

「あ……」

「一人でよく頑張ったね」

そこにはその眼鏡のレンズ越しから覗く瞳が優しく微笑む青年、
戸雅とまさしが立っていた。

04・使命 桜色紅葉（後書き）

皆さんの掲載ペースを崩してしまいましたが一応頑張って書いてみました。

何時間もずっとひたすら掲載に身を捧げたんで少しでも皆の雰囲気に馴染めてれば幸いです。

次の♪ペさんにじる期待!!

私がいつもくじけそうになると決まって助けにきててくれる人。いつもなぜか誰かに頼りたいときに私の田の前に現れて手を差し伸べてくれる。別に異性としてどうこうという感情はない。むしろ、頼りになる兄という感じだ。もつとうならば、私が安心して泣ける数少ない場所。

「雅さん・・・。もう、もう耐えられない・・・」

そういう終える前に私は泣き出してしまっていた。

「よくここまで頑張ったね。あともう一息だ。それに、五郎は自分のせいで四季を泣かしてしまつてはいると思つと悲しくなると思つよ。だから、ね」

「うん、うん」

まともに喋ることすらできないぐらいた私は泣き崩れていた。確かにこれでは五郎君も心配してしまつ。

数分後、ようやく泣き止んだ私に

「そろそろ、離れてくれないかな?」

「え? 気づくと私は雅さんにはばりついて泣いていたらしく、彼の着ていた黒いコートが涙と鼻水で少々、いやかなり汚れていた」「ごめんなさい! ああ、ぜんぜん汚れが落ちない・・・」

「ダイジョブ。これもさしこそで拾つてきたのだから」

そういうつて雅さんは持つていたバックから今度は高そうな黒のコートをだし、それに着替えた。いや、それよりも

「なんで、そんなの拾つて着ているんですか!?」

「なんでつて、君が毎回毎回僕にへばりついて泣くからコートを毎回毎回新しいの買わなくちゃいけないんだよ。だから今回はその予防策として拾つてきたコートを着てきたんだよ」

・・・、相変わらず優しいのにさりげなく嫌味を言つてくる人だ。

それに新しいの買わないで洗えばいいじゃん…

「さて、僕は君のやつていたことの続きをしていくか」

待つていて

「…」

そつと雅さんは五郎君の入ったポリ袋を引きずりどこかへ消えた。

数分後、雅さんは手ぶらで戻ってきた。

「おまたせ。さあ、次は一村君を奪還しなくちゃいけない。そもそも彼の治療も終わってる」

「…、はい」

そつと雅さんは、一村君のいる病院に向かった。

- - - - -

ここま・・・?

周りを見渡すとほとんど何もなく普通の、どこにでもありそうな病室の風景。

・・・、そつと雅さんは確かに目標の少女に腹をナイフで刺されたんだつけ。・・・、もしれないさんにこのことが伝わってたらなに言われるかわかったもんじゃないぞ。いや、おそれくすでに伝わっているんだろうな・・・。しかも、新人君にもきっと伝わってるんだろうな〜。どうしよう、帰りたくないなってきたわ。

「はあ〜、帰りたくね〜〜〜！」

今度は口に出して言つてみた。べつに誰かに同意をえたかったわけでもないのに

「そつか・・・。ならば手伝つてやろう」

だれだ！？そつと雅見たときは誰もいなかつたし、俺が気づけないほ

ど気配を殺せるつて」とは同業者か！？

「だれだ？」

内心とは逆に冷静を装つた口調でそう言つて扉のほうを見てみると、全身黒い服で覆われたいかにもつて感じの男が立つていた。その男が纏つているオーラは確実に負のオーラだ。憎しみ、怒り、悲しみ・

・・そんなものがじちゃ混ぜになつたような禍々しいオーラだ。

「だれだ、とはご挨拶じやないか。家のかわいい鈴蘭を殺つとして「だれだ鈴蘭つて？・・・、確か今回の目標ターゲットだつたやつか！！

「ほお～、おまえは近江一家のやつか？なんだ仇討ちにでも来たのか？なら止めとけ。そんなことしたら俺の一派と近江一家で戦争になるぞ？」

「そんなもん関係ない！！」

そういうつて男は持つっていたナイフを高々と持ち上げた。

05・なんかなるさじやなんともならないのが人生　ポペ（後書き）

活動報告でいろいろ言い訳しますのでそちらをみてください。

男は右手を振り上げて、何の迷いも無くソレを顔面田掛けて振り下ろした。

ドスツ

ナイフが突き刺さる鈍い音と共に、さっきまで俺が頭を預けていた物から羽毛が舞い上がる。

「！」のり 少しは話を聞けえ……！」

俺は眉間を狙つてきた容赦ない一撃を何とかかわし、すかさず男を力いっぱい蹴り飛ばす。

「いっ てえー……」

下腹部がムリな行動を非難して叫び始める。立つことさえギリギリだつたのに飛び蹴りは流石に不味かつたか……

男は渾身の蹴りを軽くいなして距離をとる。ダメージは『えられなかつたが距離が取れたので良かつたことにじよづ。

「へえ、腹に穴が開いているのにそんな力が出るのか。少し悔つていた」

俺の蹴りが当たつたであろう太腿あたりを埃を払う様な仕草をしながら、男は余裕たつぱりにこちらを見据えてくる。……そういうやこいつ、ブリーフィングに配られた資料のはしつこに小さく載つていたな。たしか……

「今のは腹の傷を忘れて力配分をミスつただけ。もうこんなに出したくなえよ。といひで……いつて」

下腹部がしつとつとしてくる。あーあ、傷が開いちゃったか。

「あんたが近江一派の『若旦那』、近江義光だな？質問なんだがなんで病院にいるんだ？鈴蘭……だつたか？そいつを殺したのは俺じゃないし、俺を殺したつてれいさんが仇を取りにくるとは思えない。俺を殺したつてなんの得にもならないぜ？」

取りあえず武器になりそうな物を探す時間稼ぎ兼、遠回しの命乞いをしてみる。

近くには机があり、その上には力チ力チに固まつたお粥と季節外れのブロックに切られたスイカが置いてある。おそらく看護婦さんが持つててくれたのだろう。せめてナイフでも、と期待してみたけど希望はすぐに消えていった。

後方にはこの街を一望できるのではと思えてしまつほどの景色を映している窓。前方は近江義光とその後ろに扉がある。

……逃げ道は唯一つ。あとはどうやって隙をつくるかが問題だ。

「別に御凪本人を誘き出したいと思つてゐる訳ではない。……まあ、最終的には消すがね。『お前達』は鈴蘭を殺した。だから我々も『お前達』を殺す。ただそれだけのことだ。全面戦争？笑わせる。戦争というのは互いの力が同じ時のみ使用される言葉だ。こちらが一方的に御凪一派（お前達）を殺したらそれは戦争ではなく虐殺だ。言葉を選べ、若造」

「虐殺……ねえ。あんた、御凪一派をなめすぎじゃないか？そんな

おれたち

甘ちぢみの考えをしてると本当に虐殺が起きひやうぜ？……あ、これ食う？俺こんなに食えねえ」

そう言つて机にあつたスイカに手を伸ばして一個を口に入れて、残り全部を近江義光の方に差し出す。

「……いや、俺はスイカに塩をつけて食べるタイプだ。塩がないならいらん。それにそんな干からびたのを食つても口の中が乾くだけだ」

「あ、そ」

俺は差し出した手を引っ込める。なるほど、『若旦那』といつの名前は伊達じゃない。なかなかの観察力があるようだ。近江義光は話を続ける。

「なめられて仕方ないと思つがね？現に我々が御廻おまへたち一派のトラックを爆破しても怖氣づいたのか、なにも仕掛けてこないじゃないか。衛生兵を殺したと部下が言つていたな。なるほど、衛生兵は仲間じゃないといつのか」

くつくと、近江義光は冷たく、嫌らしく笑う。

「衛生兵を殺した……だと？」

空気が変わる。第一線で活躍する衛生兵はアイツしかいない……まさか……

「まさか……吾郎を殺したのか！？」

スイカを食べた時に使つていたフォークを強く握り、俺は叫んでいた。かなりの怒号だつたが流石『若旦那』、そんなことでは怯みもしない。

「さあ？名前なんて聞いてないな。なんだ、怒つているのか？……いや、悲しんでいるのか。悲しむことはない、何故なら……」

近江義光もまた、再びナイフを握り締める。

「お前もここで死ぬからだ」

鋭い一閃。ナイフが銀の軌跡を描き、俺の眉間を切り裂く。初撃と同じ位置。なら……

俺は咄嗟に机にあつたお粥に使うものであろうスプーンを手に取り、額をガードする。ガチッと金属と金属がぶつかる音が病室に響き渡る。

相手も流石ににこの行動には驚き、一度ナイフを引き一太刀目を下段に放つてきた。一直線にナイフが迫つてくる。……直線ならば防ぐ手段はある！

右手に持つていたフォークを直線の延長線上に垂直に振り下ろす。フォークのくぼみにナイフが挟まり、今度はガチリという金属同士が噛み合う音が鳴る。ナイフの鐔が挟まって刃は俺に届かず静止する。

「ほお……フォークで戦つとは”裸の蛇”気取りか？」

「気取り……ねえ」

そう茶化してくるが、一切力は抜かない。俺も全力で受け止める。

「さつき、俺を殺してもれいさんは仇は取りに来ないと言ったよな？　あの人……俺を戦場に送るとき、武器を支給してくれないんだ。みんなにはいい銃を渡すのに、俺だけ『がんばれ！』って言って笑いながらへりから俺を叩き落すんだ。そう、銃も弾も毎回現地調達だ。最初、臨機応変に対応できるような技術を叩き込まれているんだ、と思っていた。でも、ある口気づいたんだ……」

ガチリッ　完璧に噛み合った。

「れいさんは……俺のことをいちめん楽しがっていたんだ！……」

俺は右手を大きく回し、ナイフを振り払う。ナイフは近江義光の手から離れてフォーケーと飛んでいく。

「何が言いたいかというと、俺は武器が無くてもある程度は戦えるってことだ！　じゃあな！　吾郎の仇はいつか取る。覚えていろよ！……」

そのまますぐに後ろに飛び窓を開け、ケーブルで繋がったナースホールを片手に窓から飛び降りた

06・戦闘 K(後書き)

取りあえず誤字訂正、ちょい追加。ぶつ壊してごめんなさいw
といふか話が全然進まなかつたな……orz

四季からの通信を切るとれいは自分と同じように作業を中断して無線に耳を傾けていたメンバーに指示を出す。

「話は聞いてたね、六条、七弥、今回は一人にも出でもらひ。四季と八戸のバックアップに回れ」

手短にそう言うとれいはくる、と享一のほうへ向き直る。

「ごめんね、一之瀬くん。着いてそうそうなんだけど、頼まれてくれるかな？」

言葉と態度とは裏腹にれいの瞳に宿る光は鈍く沈んでいる。享一としては引き受けるも何もないでのためらわずに頷く。

「源三も」

「りょーかい」

れいは二人の武器を携え歩き出した。

れいの向かつた先は入り口へ戻る道を一本逸れたところにある車庫だった。

一台の車の前でれいは立ち止まつた。

つや消しブラックのボディ、BMW・7シリーズ。

「車……」

「そう、E67、防弾もばっちりだよ」

享一の咳きに、れいは律儀に言葉を返す。

「運転は？」

「フフ。私、18だから」

「一年前から乗つてましたけどね」

源三の告げ口にれいはフフ、と意味深に笑つて返すと車に乗り込む。それを見て二人も続く。

れいが左前部の運転席、源三が助手席に着き、享一がリアシートを陣取つた。

「あ、そうそう」「

車を発進してから数分後、れいは唐突に口を開いた。

「一之瀬くん、レミントン出して」

なにかと思えば、享一はれいの言葉に素直に従い、ベースケースからレミントンM700を取り出す。

「これ、没収ね」

そう言つてれいは後ろ手に狙撃銃を掴むと自分の足元に無造作に置く。

その唐突すぎる行動に享一ただ辟易するのみ。

「源三、ガバ貸して」

続いての矛先は源三。れいは運転しつつ片手の平を源三方に仰向け催促する。

「あ、はい」

言われて源三は腰から砂漠迷彩の施されたコルトガバメントを取り出しけいへと差し出す。

「一之瀬とも」

「え」

「は・や・く」

れいはせつづくように差し出した手を一度ふる。

一瞬の戸惑いを見せたものの源三は素直に従い懐から雪上迷彩の施されたコルトガバメントを出す。

「一之瀬くん、これ持つておいて」

一之瀬とも片手で受け取つたれいはリアシートへと無造作に投げる。意表をついて出現した二つの拳銃をどうにか受け止めると享一は自分の腰に手を回しベレッタを触る。

「俺にはベレッタが」

「源三、私がピンチになると撃つちゃうから」

享一の言葉をさえぎつたれいの横には不満げな源三が。それを横目で見てれいはフフ、と笑う。

「はあ……」

享一は曖昧に頷くしかない。

「あ、ピンチのときでも私が合図するまで撃つりゃだめだよ」

「れいがそう言つなら……」

その言葉には嘘はなかった。れいと共にした時間は僅かだが、享一にそう思わせるものをたしかにれいは持っていた。

「あ、初めて名前呼んでくれた」

そんな享一の思いとは裏腹に、れいは重箱の隅をつつくなどうでもいいことに気づく。

「や、別に」

完全な不意打ちを喰らう享一は思わずたじろぐ。

「れい、前」

照れた享一の顔を見よつと思つて後ろを振り向いていたれいに努めて冷静に源三は注意を促した。

「え？」

それは少し遅かったかもしれない。れいが急いで前に向き直つたときには既に視界一杯の壁、慌ててブレーキを踏みハンドルを切ることでどうにか激突は避けられたものの、シートベルトを締めていなかつた享一とれいは派手に前のめりになつた。れいが額をぶつけたクラクションが鳴り響く。

「いたーい」

れいの率直な反応に何故か車内では笑いの渦が巻き起つた。

れいは車をバックさせ道へと戻る。

踏み込んだアクセルはほんのつかの間の休息が終わる合図だった。

07・団鑿 消炭灰介（後書き）

（*。。）：ブハツ
どうも、消炭灰介です。

一周しましたね、物語のほうは消炭の手を離れ大きく立派に成長しましたが今回は初期の三人のお話です。
物語の流れとしては現状維持……ですかね？

なお、今回張った拳銃の複線を誰も使ってくれない場合は消炭灰介は自動爆破されるのでお気をつけください。

それでは真那さんへバスですノシ

病院の向い側の低いビルの屋上に私達はいる。透君は3階の病室にいる。はずだ、生きていれば。

「大丈夫、あいつはこんな簡単に死ぬような奴じゃないよ。」

不安そうな四季の顔を勇気づけるように、ハ戸は彼女の頭を”クシヤ”っと撫でた。四季は恥ずかしがりながらもそれを受け入れた。

「あの部屋のはずなんだけど……。」

ハ戸は撫でるのを止めて1室を指差す。窓を開け放たれカーテンがなびく。その不規則な動きで部屋の中が断片的に姿を見せる。

「うそっ！？透君……いないよー？」

四季は柵に乗り出して慌てる。さすがのハ戸もこれには驚いて返す言葉がなかつた。

「とりあえず…………、六条と七弥を待とつ。僕達はもう動けるほど体力がないしな。」

ハ戸は柵に寄り掛かるように胡坐をかいて座り、四季も座るよう促した。

……。

無音が10秒ほど流れた。四季が困ったような顔で話題を探している。ハ戸はカバンから餡パンと牛乳を2個ずつ取り出した。

「食べるか？」

彼女はとてつもなく突っ込みを入れたかったがその全ての言葉を

飲み込み、
変わりにこう言つてから好物の餡パンを頬張つた。

「……………ありがとう！」

木々に囲まれた山奥にある近江一家の隠れ家。2階建ての白い外壁はひび割れやペンキの剥げが目立つ。今日は普段と雰囲気が違う様子

「へえおつて、さうして鈴蘭が

若い男達が壁を何度も殴る。拳の皮膚に擦れ、血が滲んでいた。

「盗める物盗んで、奴らを皆殺しだ！」

「そりだー! ぶつ殺してやがるー! 」

男達が怒りに支配されている時、ヘリコプターの騒音が近付いてきた。

「おい、あのへりおかしくねーか？」
1人の男が指差す。

「何で速度落とさないで突っ込んでき.....!!」

(ズドオオーーーーン!!!!)

ヘリは2階に直撃。窓ガラスと外壁を突き破つて侵入してきた。それと同時に飛び降りたパイロットが黒煙を纏いながら床に着地した。

「ゴホツ、ゴホツ、一体何が？」

状況を把握する前に1人の男の首が転がった。

袖も裾もボロボロの漆黒のロングコートを着、顔も含め身体中を所々血塗られた包帯で包まれたパイロットは右手に身の丈を軽く越える鎌を持っている。その姿は誰がどこから見ても死神だ。

「誰だテメー！？」

間髪入れずに銃弾が放たれた。しかしその銃弾は死神の目の前で消えた。釜を振るう速度が速過ぎて常人の目では追えきれないようだ。

「これから死ぬ貴様等に名乗る名など持ち合わせておらぬ。強いて言つながらば……衛生兵よう——！」

死神に振り回される釜がいくつもの首を宙に舞わせた。数分後、近江一家の隠れ家は倒壊した。

「それでも……遅いですね~。」

四季は欠伸しながら言つた。餡パンも牛乳も既に2人の胃の中だ。緊張の糸が切れたのか2人共極度の眠気に襲われている。

「なんなら寝てもいいよ、美里。」

「久しぶりに名前で呼んでくれましたね。」

「た、たまにはいいじゃんか。」
目線を反らし口を尖らせる八戸。

「あれー？照れてるんですかー？」

四季が八戸との距離を縮める。八戸は彼女を視界に入れまいと首を必死に振る。しかし彼女はしつこくついてきた。

「ちょっと雅さん！」

四季が”グイ”つとさらに顔を近付けると八戸はさらに動搖して手をばたつかせ、なぜか2人は倒れてしまった。四季が仰向けになりその上に八戸が押し倒したかのような位置取りは、まさか、まさか……！？

「雅……さん。」

「美里亜……。」

（ガ、ガガガーー！）

空気を打ち壊すかのように無線が鳴りだす。2人は咄嗟に起き上がり背中合わせに座つた。顔を見ずともお互いに赤面しているのは丸分かりだ。

「こちら六条よ。どこにいる。」

無線の声は六条ゆりだ。八戸は自分達の居場所を告げた。できるだけ平静を裝つて。

六条達が来たのはすぐに分かつた。殺し屋にしては……いや、どんな人間にしても目立ち過ぎるデコトラが姿を現したのだ。こんなトラックを運転するのはアイツしかいない。2人は苦笑いをし合つてからビルを下りた。

「イヤツツツホオオーーイー！2人共生きてて良かつたわああーーーっはつはつはつーーーー私つったら有る事無い事妄想し

過ぎてバナナと間違えてキウリ食べたのよおおーーほほほー

!

リーゼントに捻り鉢巻き、剃りすぎて青くなつた顎と口回り、そしてこの気持ち悪い程に超がつくハイテンションの早口オカマはそ
う、日比野吾郎の弟にして兄を越える変態の日比野千歳ちとせだ。

「し、心配ありがとうね。」

2人は千歳に手を振つてありとあらゆる改造がほどこされたテコトラに乗り込んだ。

08 · その灯火、簡単に消えないのが人間　? (後書き)

更新の早さなら私だって少しは自信があります！
でもこれで明日は寝不足決定です(˘ ˘ ; ;)

from · 真那

-病院裏-

五人がデコトラで病院の周りを回っていると、八戸が地面についた赤い点を見付けた。

「おいちょつと止めろ！…見ろ、これ血痕だ…」

八戸は後ろのリヤダンプから飛び降り、地面の血を指ですくう。

「…あの…」つちに…」

藤野は路地裏を指差して出来る限りの声を出した。

「一村君…！」

四季の声に合わせて全員が駆け寄る。

「おや！？早い」到着だねえ…」

「だあれ～？そここのイケメン～？」

「誰だ？そここのオカマ？…フツ…眞土の土産に教えてやれば…只の始末屋…」

「問答無用！！！」

八戸は腰のS&Wエアウエイトを抜き、たらたら喋る始末屋と名乗る男の額目掛けて弾丸を放つた。

だが男はそれを寸前でかわす。

「つぶな…人の話を聞かない奴は…主人に代わってお仕置きだ…！」

「この腐れ才タガ…美…四季…俺と一緒に一村運ぶぞ…！…六条、藤野、オ…千歳！時間稼げ…！」

「…」

「…了解…」

「わかつたわよ～

八戸は肩をすくめながらも、一村を担いでその場を後にした。

「おや！？逃げ足が速いねえ…お前らにじこは任せせる。俺は奴らを

追う…！」

男はそれだけ言い残し、三人の後を追つた。さらにそれを追うべく走り出そうとすると、間に五人の男が割つて入つた。

「そういうわけにはいかないんだなあ……これがさあ……」

男の一人がCZE VZ83を取り出し三人に向けて引き金を引いた。

そのうちの一発が日比野の肩を掠める。

「いつつたいやないのよおおおおつつ……」

日比野は物陰に飛び込み、肩に掛けていたH&K MP5を撃ち返した。

「えーっと……私は……これかな……」

六条はスカートの裾を捲り、太股に巻き付けたサイホルスターからP226を取り出して構えた。

だが、敵はAK-47を絶えず撃ち込み隙を見せない。

「これじゃあ埒があかないわよお……」

日比野はマガジンを代えながら叫ぶ。その足は相変わらず内股だ。

「……うーん……」

六条もマガジンを代えながら唸る。

「……えつと……じゃあ、僕が……」

藤野は学ランを捲り、ベルトに着けてあつたMK3A2手榴弾の安全ピンを抜いて、敵に投げ付けた。

手榴弾は敵の足元に転がり、二人の足を吹き飛ばし、残り三人を壁に叩きつけた。

「ごめんなさいねえ……本当だつたら虚めてあげたんだけど……時間、ないのよねえ……」

日比野は敵の頭に銃口を押し付け、マガジンが空になるまで引き金を引き続けた。

後ろでも同じように、一人がそれぞれどどめをさした。

「はあ……疲れたわあ……もう、手榴弾なんて便利な物があるなら早く言つてよね……それより、トラックに灯油積んであるから取ってきて、こいつら燃やしちゃうから。」

「…」

「わかつたわよ！自分で行けばいいんでしょう！オカマなめると痛い目にあうんだからつづつ…！」

日比野は大きな声で独り言を言いながらトランクに向かつた。

・路上・

四季は辺りを警戒し、ハ戸は一村を担ぎひたすらに歩いていた。

「しつかりしろ！じきに派手なテコトラが追いからな！」

「…はい…」

「ハツハアツ…！残念だがここまでだ…！」

「そういうベタなセリフさあ…虫酸が走るんだよ…！…四季美里亞、一村を頼む…！」

ハ戸は一村を降ろすと、眼鏡を外した。

「ケケツ！これから戦うのに眼鏡外すバカがどこにいる…！」

「生憎、伊達なもんでね…！」

それには四季もビックリだつた。

「伊達なの…？」

ハ戸はそんな疑問に目もくれず、集中力を高める。敵も腰の銃に手をかけ動かない。

すると、緊迫した空気を引き裂くようにタイヤのスケール音が響いた。

敵が音に気付き振り向いた時には、黒のBMWが目前に迫っていた。BMWは敵を天高く撥ね飛ばし、ハ戸の足にも少しふつかり止まつた。

「痛ツ…！」

「あつごめん。」

中から降りてきたれいは軽く謝ると、享一にとどめをさすよう顎を突き動かした。

享一は表情一つ変えずに、迷った挙げ句コルトガバメント雪上迷彩

でどじめをさした。

「あつ俺の！！」

源三が叫んだが享一は一切聞く耳を持たず、クナイで死体を突つつき遊んでいた。

「フフツ…助かつたでしょ。」

「まあな…それより一村を…」

「あつどじめん。行かなきやいけないところがあるから…ほら、行くわよ！」

二人が乗り込み一人が頭を引っ込めBMWは颯爽と走り去った。

「…早きこと風の如く…か？」

「兵法ですか？」

呆然とする二人、いや三人の元に騒々しいデコトラのお迎えが到着した。

アクセル全開でやつて来たテコトラはキイーーーと無駄に豪快なドリフトを掛けて3人の前で停止した。

「ツとーあつぶないなー。わっさのれいといー、もう少し穩便にはなれないのかな」

ハ戸がブツブツと不満を言つと、開いた運転席から、

「んんもうー!そんなこと言わないでよハ戸ちゅわああん!乙女はいつだつて勇ましい生き物なんだからあああん。そーいえば眼鏡を外した姿もイ・ケ・メ・ンね」

無駄に腰をくねらせながら話す千歳にハ戸は少し顔を引き攣るが、千歳は四季が肩を組み、支えている一村へと視線をズラすと真剣な顔つきになつて、

「一人ともーー一村きゅんを止血するから早くトラックに乗せちやうてーあとゆりちゅあん運転少し任せたわねん」

「……つん」

千歳は六条にそう言つてウインクをし後ろの荷台へと乗り込んでいくのと同時に六条と七弥はそれぞれ運転席と助手席に乗つていった。そもそもハ戸も四季と共に一村を肩で支えそこへ連れていく。荷台に登れば先程までほとんど物がなかつた空間に様々な救急セットがところ狭しと広げられていた。シンプルに包帯やオキシドールからよく分からぬ薬品名が載つてゐるビンまで……。そして手際よく

それらをこじる千歳を見て、

「ほおー やつぱり兄弟なんだな」

とハロが感慨しくしていふと、

「んもううう間違つてるわ……兄弟じゃなくて姉妹よし・ま・い」

田から沢山星が出てるんではないかと思ひ位のお決まりのお色気を決めた千歳。

それと同時にHンジンが駆けられテコトコは静かに発進した。

しばらくして一村の止血が終わつたのを皮切りに四季が彼に質問をする。

「ねえ……一村くん……一体、病院でなにがあつたの？」

3人の視線が一村の回答を待つていた。

「…それが……」

眉間に皺を寄せた一村は頭で少し言葉を纏めてから再び口を開いた。

あの少女に刺された所から始まり、全身黒を身に纏つた男に襲撃された時のあらましを思い出す限り。

「近江一派と言えば、裏社会では最強にして最凶を異名とする組織だよね。組員も尋常じやない位いて、この日本の行政の一部を裏で牛耳つてこるとも噂されるほどなの……」

「じゃあ私達はそいつらに喧嘩を売つちやつた訳ねええ。例え仕事
だつたとしても……でもこいつなつたからには真っ向と戦わないとい
けないわね」

ハヽと千歳がそつ返し皆は考え込む。

思い出したように一村は控えめに聞いた。

「…その…そいつから聞いたんだが、吾郎が殺られたつていうのは、
本当なのか」

「うん… 本当だよ」

四季がそつ言い悲しみのオーラが降りかかる。ただ一人千歳を除いて。

「そつき四季ちゃんにそれを聞いた時も私なんとなく思つたのよ。
吾郎ちゃんはまだ生きてるんじやないかつて」

「残念だけど、それはない」

千歳の発言にそつ言つたハヽと四季は嫌でもそれを認めるしかなか
つた。一人で処理した遺体の感触を忘れることなんてできない。

「いや、絶対そつよ……ほらーこの女の勘つてよく当たるじやない
?だから私は信じるわ。いつか吾郎ちゃんに会えるつて」

笑顔で言つ千歳はなんか説得力があつて、聞いていた3人も心持ち
が軽くなるのを感じた。

「ひとまず今は近江の襲撃やお嬢様からの指令もないし本部に戻ま

しうつか。ゆうぢやーんお願ひー！」

「…もう向かつてゐる」

人氣のない林道を走る^{ヒトツ}コトワは山中を軽やかに走行していった。

目標に逃げられた病院からそのまま車に乗っていた義光は御凪一派の始末に当たせた始末屋共との連絡が途絶えた事にイラつきハンドルに拳をぶつける。

「くそつ…！あんなガキ共なんぞすぐ一掃出来ると思ひきや、なんてつかえねえんだウチの部下は…！隠れ蓑^{みの}も陥落しちまつたし今ウチは危機的状況だ。でも御凪をこのまま野放しになんてできねえ…」

…

スーツのポケットから携帯電話を手にし部下へ連絡をする。

「おい、近江総出の緊急招集をかけるぞ。殺しに精通する者を出来る限り集めろ、いいな！」

電話を切つてから義光は更にアクセルを踏み込んで近江家へと急いだ。

10・予感 桜色紅葉（後書き）

耐震偽装の紅葉です。

またやつてしまいました……。どうして動きある展開に出来ないのか本当に悔しいです。

更新もすぐ出来なくて一日ブラング空きました。

小説やっぱし難しい（：—：）
次のペペさん。キラーパス、ゴメンなさい。〇〇〇

・・・、あれは少し前のことだった。かなり鮮明に覚えている。あの日は少し雨が降つていたぐらいでとくに変わつたことはなかつた。

俺はいつもと同じように学校に行き、帰る。そんなくだらない毎日を送つていた。学校はぜんぜん面白くもないし、友達なんてものはいなかつた。俺の行つていた学校は金持ちが通う学校だつたが、俺の生れた家は他の奴の家と比べものにならないほどの金持ちだつた。そのため俺に寄つてくる奴らはみんな俺の家と仲良くなりたいとかそんなくだらない理由ばかり。誰も俺を見なかつた、誰も俺を見ようとした。そんなことはどうでもよつたが・・・。

あの日、俺は学校をサボり庶民の住むエリアに行き庶民のために作られた店に入り、適当に時間をつぶし学校に戻ろうとしたときに俺はあの少女と出会つた。

歩きなれた学校までの道。一人で人ごみの中を歩いていたときに俺は俺に目線をずっと向けている奴がいることに気づいた。が、とくに気にすることなく歩いていたがついにその視線の送り主が俺の後ろに来て俺の財布を盗り逃げ去ろうとした。俺は盗人が逃げた方向を見た。そして俺は驚いた。盗人は大人じゃなくて子供、しかも男の子ではなく女の子。だがそんなことは関係ない。俺はその少女を追い、そして路地裏に追い詰めた。そして問い合わせる。・・・、横にいるホームレスのおっさんがこっちを見ているが関係ない。風景と思い込むことにしよう。

「おい、盗った財布を返せ」

「な、なにも盗つてなんかないよ!」

「・・・、もう一度叫ぶ。盗ったものを返せ」

「・・・、はい」

差し出された俺の財布を受け取ったが軽すぎる。

「・・・。中身もだ」

「・・・」

「よし。・・・、おまえなんでこんなことをした?」

「・・・、あなたには関係ないでしょーーー」

「つふ、そうだな。だが、あんまりやりすぎると堅気に戻れなくなれるぞ?・・・、戻る気もないのか」

「・・・」

「・・・、もう行つていいぞ」

そういうと少女は逃げるようごどつかにいつた。少女の瞳から零がこぼれていたのはあめのせいだったのか俺のせいだったのかはわからないが・・・。

・・・それよりもこいつたい何処に帰るんだ?・・・まあ、俺には関係ないし、もう会つこともないだろ?」

「・・・、坊主。さつきのは言い過ぎじゃないか?お嬢ちゃん、けつこひ傷ついていたよひじやぞ?少し厳しそぎたんじやないかの?」
「誰だ!?声がした方を見るとなにかおなじみのホーメレスおっさんがいた。

「・・・、俺は厳しくはない。・・・、ただ、ただ甘くもないだけだ」

「フフ、さつこひ」とじとくかの「

「ふん!俺はもう行へ。じゃあな」

そのあと俺はまっすぐ学校に行き、その数日後俺はあの少女と再会することになる。少女は俺に気づくことなく逝ってしまったが。

「ちよっと一之瀬くん！…きいてんの…？」

「…、どうやら俺は寝ていたようだ。嫌な夢だ。神といつのが本当にいるんなら俺はそうとう神に嫌われているようだ。」

「い・ち・の・せ・くん！…聞いてるんですか！…？」

「すまない、もう一度言つてくれ」

「つたくもう。ちゃんと聞いてるよな…！…もうすぐ目的地に着くから一応身だしなみを整えておけ。一応、偉い人と会うことになつているから」

手渡された鏡を見ながら俺は髪を整えていると

「れいせん、ちゃんと女の子らしいもの持つてているんですね…すこい意外…！」

と源三が言つた瞬間に助手席の窓に赤い液体が飛び散つたのを俺は見た。

「…、これは一種のスキンシップのよつなものだろ、きっと。

俺らが来たところはなんの変哲もないただのビル、中で待っていたのも見た目は普通のサラリーマンの男だった…。

11・人間時には昔を思い出す

ポペ（後書き）

活動報告にGOGOGO！

「よつじん、お待ちしておりました。5階で支部長がお待ちしております」

そうこうとサラリーマンはれい達にお辞儀をしてさがつていった。

「なあ火村、なんだこには？」

「……先輩には敬語使えよな、まあいいけどさ。ほらあそこにパンフレットがあるぞ」

源三はフロントの方を指差す。そこには何種類もの蜘蛛の絵が描かれた紙が整理されて置いてある。

「知ってる。取りに行くのがめんどいから聞いたんだ」

「はあ！？まつたく、とんでもない後輩だな……」

「フフシ、私が一之瀬くんを入隊させた理由の一つは、どんな相手にも臆さない強靭な精神を持っているからよ。後輩指導がんばつてね」

れいが笑いながら源三の肩を叩いて励ます。反面、先輩の表情はどんどんより曇っていた。

「強靭な精神というかただ生意気なだけじゃないですかれいさん……つと、エレベーターがきましたよ」

3人はエレベーターに乗り込み、れいが「5」と書かれた文字盤を押して扉が閉まっていく。

「いこはこの辺り一帯のタレコみを管理、制御、そして売買している大手情報屋『スパイダー』って会社だよ。俺達は交渉にきたんだ。くれぐれも粗相のないようにな」

ピンポーンと音が鳴り、エレベーターのドアが開く。

「おい源三、準備しておけよ」

「りょーかい」

れいの命令に従い源三がコルトガバメントの安全装置を解き、ブローバックさせて弾丸を送填する。

……交渉にきたんじやなかつたのか？ 享一は疑問に思つたが口には出さなかつた。

三人が案内された応接間には一人の男と複数人の従者^{メイド}が待つていた。

「ようこそ、御冗れい様に火村源三様。……おや、そちらの方は最近入隊なさつた一之瀬享一様ですね？ 初めまして。スコープ無しの狙撃、見事でしたよ。どうぞおかげになつてください」

男はそつうして窓側の席を獎める。従者達がお茶とナポナを持って待機している。

「フフツ、流石情報屋ね。自己紹介が省けて助かるわ……つて一之

瀬君、なにしてるの?」

享一は窓……ガラス張りの壁に近づいて外を眺めていた。その壁は5階というだけあってかなり遠くの景色まで見渡せて、一村が入院していた病院も確認することができた。

「ほり、突つ立つてないでわつわと座つなさ」

れいに袖を引っ張られて享一はれいの左隣の席に座った。

「さて、私達がここにきたのは分かつての通り、仕事を頼みにきたのよ。まずは一つ田」

従者メイドがれい達の前にお茶とナボナを置く。れいはそこで一呼吸あき、お茶を啜る。

「あなた達が既に持つている近江の情報と最新の情報、全てこちらに流してほしい。二つ田は、近江にはこちらの情報を売らないでほしい。もちろんそれなりのお金は用意してあるわ」

そういうと、源三が片手に持つていたアタッシュケースをバンつと机に置き、鍵を開けて中身を見せた。

「なるほど。あなたの要求は分かりました。ですが……」

そういうて男はナボナをかじりながらカバンの中に入つてある金を数える。

「こな量の金ではその要求には残念ながら釣り合いません」

「……なに？」

れいが眉をひそめる。それに呼応して源三の表情も険しくなる。

「たしかに一つ目の仕事だけだつたら十分すぎる量です。ですが、二つ目のあなた方の情報を売るな……これが入つてくると話が変わります」

男はそう言ってカバンを閉めて源三の方へ返す。

「二〇の金額では話になりません。出直してきて下さい」

「……フフッ、そう」

れいはいきなり立ち上がり、右手を男の方に突き出す。その手は親指がピンと立てられ、人差し指はまっすぐ男の眉間に向いていた。

「くく、お嬢さん。いくら腹が立つたからって、そんなんじゃ人は殺せませんよ」

「フフッ、そうだったらよかつたのにね」

力チャ と音が鳴り、右隣で源三がコルトガバメントを構える。

「交渉決裂ね。さよなら」

れいが死の宣告をする。源三は指に力を込めて引き金を絞る……

「待て」

蚊帳の外だつた享一が二人の間に割つて入つて、銃と右腕を下げさせゐる。

「……なんのつもり？」

れいが冷徹な目を享一に向ける。はあ、と享一は軽くため息をつき後ろに振り返る。

「あそこ、狙撃兵スナイパーが三人。蜘蛛のマークがついているからこいつらの仲間だらう」

「……流石一之瀬様。ほんとうに目がいいんですね」

享一は男の贅辞を無視してポケットから紙を取り出し、机においてあつたペンを手に取りサラサラと書き始めた。

「これでどうだ」

紙を男に突き出して享一はペンを放る。その紙はカバンの中の何十倍もの金額が書かれた小切手だった。

見やすいかな?...と思ふHンター押しまくつてみたけどどうですか?

しかし、れいは享一を手で制すると小切手を回収して、これみよがしに胸ポケットへとしまう。

足を組み、机に肘をつき、組んだ手の上に顎を乗せる。隠れた口元は笑みの形に歪む。

「そんなもつともな位置に狙撃手を配置しちゃダメですよ、ほら」言つて、れいが右の拳を高く上げ、時計回りに回す。

「かくれんぼにすらならない」

聞くものを底冷えさせる悪魔の囁きの後に続いたのは銃声。れいは懐から携帯を出す。そして、狙つたかのようにかかってきた電話にでた。

『状況完了です。お姉さま』

「ご苦労、七弥に減音器サブレッサーくらいいつけられた言つておけ」短いやり取りで通話を終え、れいは男に向き直る。

「それでは」

れいは机の上に置かれたアタッシュケースを男のほうに押し返す。「ふざけるな」

男は肩を震わせ立ち上がる。振り上げた手に掴むのはティーカップ。それをそのままれいの頭めがけて振り下ろした。

瞬間。耳をつんざく音、れいの頬を紅茶と血が混ざった液体が滴る。

あまりに唐突な出来事だったので享一と源三は反応できなかつた。

「ちつ」

舌打、源三は咄嗟に振り向くと手に持つていたガバメントを男の頭に向け躊躇せず引き金を引く。しかし、響いた音は、

「ハハハハ」

というれいの笑い声だつた。享一も俯きがちに口元を掌でおさえ、必死に笑いをこらえている。

「だから言つただろ、源三、お前は私に少しでも何かあるとすぐ引き金を引く」

「ええ、れいはまた「ハハハハハ」と高笑つ。頭から血を流しながら。

「だから返すとき一之瀬くんに頼んで、おもちやとすり替えてもらった」

れいは息をつくと、口元を盛大に一やけさせ、源三のおもちやに腰を抜して床に尻餅をつく男を見下ろす。

「それでは、名もなき情報屋さん？ 私たちの要求は受け入れてもらえるでしょうか？」

「お前たちが先に手を出したんだりうが……」

男は頭を抑え力なく、呟く。

たしかに先に荒事にしたのは源三だ、しかし、

「私たちは正義の味方ではありませんので」

れいは臆面なく笑顔でそう言い切る。

「わかった。要求は受け入れる。金はいらない、もう出て行け……」

「ありがとうございます。では情報は後日」

言つて、れいは武器を連れて部屋を後にした。

頭の傷は派手に血が出る。幸いにもれいの傷口は浅く、ハンカチで血を拭き、絆創膏を張るだけで血は止まつた。

「はあ」

れいは大きく溜息をつくと、Hレベーターのコントロールパネルに頭を打ち付ける。

「もしかして怒ります？」

訊いたのは源三。

れいはきつと一人を睨む。源三は少したじろいだものの享一にい

たつては何事もなかつたかのよつた顔でそれを受け流した。

「なんで二人とも勝手な行動するの！」

少し荒げた声には疲労の色が浮かぶ。

「ばつとして、一週間かけて一人だけで基地の徹底大掃除ね」「

ぴしつと人差し指立てて言つれいに対する一人の返事は溜息。

「なんであいつ、コレ受け取んなかったかつたんでしょうね」

源三は必死に話題を変える。アタッシュケースを示した源二の手

を見つめたれいは真剣な顔つきになつて口を開いた。

「この街で近江一族に逆らつて生きていけるわけないからな、廃業になる以上、私たちの金から足がつくのを恐れたんだらう、まつた

く賢い男だよ」

あたまの絆創膏をさわりつつ答える。

「それは、近江の連中に消されるつて意味ですか？」

「まさか……」

れいは田をつぶりかぶりをふる。そんなわけない。と。

「でも情報屋つて一番最初に消されるイメージが……」

「映画の観すぎだ。情報屋は誰よりも情報を持つてゐるから一番早く身の危険を知り、逃げ出すことができる」

「そんなもんですかね」

「まあ、三流はどうか知らないが、少なくともアイツは一流だ。命と金、どっちが大事かよくわきまえてるよ」

フフ、とれいはいつものように笑う。その声にはいつもと違う自嘲めいた響きが宿いて、

「私たちと違つてな」

しかし、後の言葉は自信満々に言つ。

「……だれかボタンを押せ」

腕を組み、壁に寄りかかつて一人の会話を静観してゐた享一が、見かねて口を開いた。

「あ」

あわてて、れいはコントロールパネルの1階ボタンを押す。

「そ、今日は疲れた、もつみんな集まつてると頃つて、帰つて、一杯やろつか」
「未成年ですよ」
「やだなあ、ジュースだよ」
『嘘だな……』と思いつつも言葉に口できなに源二と事一だつた。

13・攻防 消炭灰介（後書き）

(*。。)・： ブハツ
申し訳ございません時系列がよくわからなくて
あの後すぐなのか？だとしたらガバメントいつ返したんだ？つか四
季とかいきなりだすなよ俺、みたいな思考のループの結果、頭がパ
ンクしてしまいました。申し訳ございませんm(ーー)m
次話で修正お願いします。

14・未成年の飲酒は法律で禁止されていますが何か？（有）

「全員グラスは持ったかー？」

基地の中で一番広い部屋。あえてそこを食堂にしている。まあ食堂といつてもコックがいなけりやキッチンもない。皆で寄せ集めのものでワイワイやるだけだ。

「おい、聞いてるのか！？」

乱雑に並ぶ木製のテーブルとそこに群がる濁った眼を持つ若い男女達。その中心でれいはビールケースを積んだお立ち台の上で声を散らしていたが限界がきた。

「勝手に始めるからな！一之瀬君の歓迎会の意味を含めて……かんぱああ——い！」

れいが右手のグラス（本人曰く葡萄ジュース）を高々に上げると、

「かんぱああ——い！……！」

なんだかんだココだけはいつも揃う。

普段は暗いメンバーもこの時だけは良い顔をしている。れいは武器の顔を一つ一つ見渡してから葡萄ジュース（？）を一気飲みした。

「いいぞれ——！」

歓声が上ると同時にれいはお立ち台から落ちた。爆笑が巻き起る中、源三がれいを起こしに行く。

「大丈夫かー？」

源三も葡萄ジュース（？）を飲んだ模様。千鳥足でれいのもとに駆けつけ、そして殴られた。

「おい、敬語はどーしたー！」

酔いのためか加減をしらないれいの右ストレートが源三のみぞおちを貫き、源三は泣いた。

源三川を勝ち抜きたがままのままに元に云ふ

「酔つたあの人には近づくなよ。」

「 」

重刊小原北園著「阿蘭陀」一卷

「あー、いかぐーん！」

宗三郎出来た。力がれいか色ひがいふつかがりながらやつて來た。

「ほらほら、渋ーく茶なんか飲んでないで一発呑やつなさこよー。」
皆の視線が一気に集まつた。

「いや、そんなネタなんて……。」

毎回の決算に悪影響がある

果然二二、一九三一。二九三九、一九一九。二

達。

11

横から六条が何かを手渡してきた。

「對力謀」與「對力限競」

享一は自分がもう逃れられないと悟った。

「うなりやヤケだ！！」

八戸が残して行つた明らかに度数の高いジュース（？）を飲み干し、テープルに飛び乗つた。湧き上がる歓声。期待に満ちた目やこれら起つて笑いを堪え切れず口を押さえる顔が享一を凝視する。アイテムを装着し、息を大きく吸つてそして……。

1時間経つてもその騒ぎは収まらなかつた。何人が隅で潰れた者やイビキを立てる者やスベつて落ち込む者がいるが。

「そーいえば八戸と四季！」
れいの次の標的が決まつた。

「お前ら最近仲良さそうだなあ！」

れいの笑顔には何か黒いものが隠されていた。八戸は千歳のほうを見た。満開の笑みでピースしている。

「（屋上でのこと、知つてたのか！？）」

八戸の頬を嫌な汗が流れる。

「よし、ちゅーしろ！」

れいの笑顔はさらに輝きを増した。

「ちゅーうーちゅーうー！」

コールがかかつた。うろたえる八戸と真っ赤な顔で俯く四季。

「な、何でちゅーすか！？」

「いいじゃん、減るもんじゃないし！」

「だからってこれは……！」

「なんだお前、初めてか？」

「イヤッ、別にそういうんじゃ……。」

「よかつたな四季、八戸のファーストキスを貰えるうじいゼー。」「だから僕は……。」

（バンシツツ！…）

シビレを切らしたのはまさかの四季だった。テーブルを両手で叩き立ち上がる。部屋は静寂に支配され皆が彼女を見つめた。

「さつきから聞いてりや何だ！雅、お前は私のこと好きなのか嫌いなのかどっちだ！？」

“酒は呑んでも呑まれるな”とはよく言つたものだ。いや、酒じやない、あくまでもジユース（？）だ。

「だから好きとかそーこうんじや……。」

「嫌いじやなきや私にちゅーじりー。」

「……。」

数秒後、静寂は今日一番の歡喜に変わった。

「よし、八戸と四季はこれからは相部屋だなー元気な子供作れよ（笑）」

れいは満足したように”カッパ びせん”を加えながらどこかに消えた。

光のない世界を死神が音も無く走る。その釜で木々はなき倒され道が出来ていく。

「そういえばあの時は危なかつたわねえ。」

独り言を言つてしまつのは人間の性だ。

「まさかトランクが爆発するなんてね。しかも四季ちゃんに見殺しにされるところだったし。埋められる直前で意識が戻つてハ戸君に気づいてもらえたからいいものの……。」

吾郎はその時を思い出したら寒気が襲つた。

「ハ戸君はちゃんと私のこと秘密にしてくれているかしら。」
彼に巻いてもらつた包帯を見つめて微笑む。正直キモイ。

「つと、たしかにいら辺のはずなよう。」

オカマ口調は相変わらずだ。

「……あつた！」

吾郎は足を止めて前方50m先にある高級そうな別荘を見つめた。
窓からは光が漏れる。

「さつさと潰しちゃいましょ……ん？」

近づいて行くと中の話の内容が聞こえてきた……。

「義光さん、こんなところに呼び出して何の用だい？」
「まずはどうぞ。」

俺は階をソファーに座るように促した。

「今日は皆さんにお力を借りたくて……。」

「隠れ家が墮ちたことと関係あります。」

白髪混じりの丸眼鏡をかけた初老のおっさんが言つ。この人は情報屋ファントムの社長だ。

「ええ、ウチの娘が殺されましてね。」

「鈴蘭ちやんがかい！？」

ツンツン髪で焼けた肌、年中アロハシャツを着たこの男は去年若くして運び屋バーの社長になつた。よく鈴蘭と遊んでくれていた。

「いつたい誰が？」

長髪で黒いスーツを崩さず、表情一つ変えない。いつは運び屋工クスの社長。

「殺し屋、御雇れいとその部下です。」

重い空気が流れる。裏業界トップの社長達ならその名前を聞いたことない者はいない。

「なるほど、私は仕事としてなら協力しましょ、復讐屋ですから。ですがこれはもう”虐殺”ではなく”戦争”になります。そのことをお忘れなく。」

「運び屋じや出来ることあるか分かんないけど、いつでも呼んでくださいな！」

「帰つて情報の整理をしてきましょ。」

男達は立ち上がつた。その時、2階から杖をついた着物姿の爺さんが下りてきた。

「ワシからもお願ひじや、力を貸してくれ。」

この人は近江柳玄。俺の父であり、泥棒屋近江家の7代目社長だ。

「近江さんにはいつも借りがあります。出来る限りのことをさせて頂きますよ。」

皆同じよつな」とを口にし、部屋を後にした。

「起きたらお身体に障りますよ。」

俺は社長を寝室に戻した。末期の癌でもう長くないらしい。しかも鈴蘭の死……。最近さらに元気がなくなってきた。せめてあの子の敵を討たなければ！

「ちょ、ちょっと何よこれ！？」

吾郎は小さな声でオーバーリアクションをする。

「早く皆に知らせなきゃ大変なことになるじゃない！」

別荘を潰すことも忘れ基地に急いだ。火傷の痕が痛んできたが気にしている場合じゃない。

「戦争が、戦争が起きちゃうわよおつー！」

この日の空はどこからでも満月を見る事ができた。雲一つなく、ただ暗闇が世界を覆っていた。しかし、この空を果たして何人の人間が見ているのか。

夜は私達と同じだ。暗くて、怖くて、皆が怯える。

でも、闇というものは光がなきゃ生まれない。光を遮るそこに闇は生まれる。

光と闇は相反しながら共存しているんだ。

私は葡萄ジュース（？）を呑みきった。

「今日はよく眠れそうだな！」

一人の屋上を後にし、寝室へと向かう。

「今日が最後の晩餐にならなきやいいが……。」

14・未成年の飲酒は法律で禁止されていますが何か?

(有)(後書き)

一村君がいつさい出てきませんが大丈夫です、生きてます。
きっと部屋で安静にしています、たぶん。

・リムジンバス内・

午後六時、新宿駅西口発羽田空港行きのオレンジのリムジンバスの中に彼女らはいた。

「…」

「…」

窓の外を流れる景色を見て、男一人はたそがれていた。そんな二人の頭をれいが後ろからどつく。

「なあにしみつたれてんのよ…！」

「…吐くぞ…」

享一はクルッと振り返り、真面目な顔でそれだけ言うとまた窓の外に視線を戻した。

れいは、煮え切らない気持ちの全てを源三にぶつける。

「ねえ…、こんな可愛い女の子ほつとくなんて男が廢るぞお…！」

れいは無い胸をグリグリと押し付けた。

「ちよつ…何してんすか…？…つていうか…まだ酔つてません?」

「フフッ、バレた?」

れいのテンションはさらに上がり、横に座る源三をバシバシと殴り続ける。

そんな二人を置き去りにして、一人前に座る享一は鋭い目付きに戻つた。

「なあによ、恐い顔してえ…」

「黙れ…！」

「えつ…」

「あつ…すまない。ただ、前の客…」

れいは前の方に座る女性客に目を凝らした。

その女性は、ジーンズに黒いTシャツを着て、淡いブルーのチェック

クのアウターを膝に掛けていた。

問題はそのアウターの袖についてるものだ。

「血…」

「…あ…」

「面白そうね…」

れいはスッと席を立ち、その女性に歩み寄る。その田代は、鋭くも楽しんでいるように見えた。

「すみません…後ろ、酔っぱらいが煩くて…」

れいはペコペコしながら女性の前を通り、窓側の席に座る。女性は一瞬怪しげだが、周囲に空席が無いことを確認すると、その警戒を解いた。

「学生さん？」

「はい！火村享子って言います。」

れいは苦しい偽名を使い相手を誘導する。

「そう…私はツキシマ サチコって言つの。」

「ツキシマ…」

「…ぐく自然な感じでせりと揺わふる。

「そうよ。お月様の月に、佐渡島の島。名前は幸せな子って書いて幸子つて書つての。

…実際は…そんなにツイても、幸せでもないけどね…」

月島は遠くを見つめ、悲しい顔をした。

その横で、れいは見えないように素早くメールを打つた。

-新宿 ビジネスホテル -

五階の一室で、ロリコン官僚を殺り終えた四季のもとに、れいからのメールが届いた。

「ん？月島幸子つて女をしらべる…何だ？…かわからんないけどやるしかないのよね…」

四季は返り血をシャワーで流してから、デニムのホットパンツに足

を通し、オフショルダーのカットソーを着て、長い髪をショショウでまとめポニーtailにして、今風のオーラを存分に出してから部屋を出た。

-リムジンバス内 -

れいは四季からの返事を苦し紛れの世間話をしながら待っていた。既にバスは品川駅を過ぎていて。

そわそわと落ち着かないでいると、ようやくメールがきた。

「…月島幸子…新潟出身の35歳…城新会幹部の愛人…か…」

「お友達?」

「ええ…まあ…」

れいは曖昧な返事を返して静かに携帯を閉じる。もちろん、メールを打った後にだ。

-新宿 カフェテラス -

一仕事、いや二仕事終わってコーヒーをする四季のもとに、再度れいからのメールが届いた。

「その幹部について調べろ?…それと…野茂瀬兄い?に話を聞け?
…はあ…また骨の折れることを…」

四季はぶつくさ言しながらも、残りのコーヒーを飲みきつてカフェを出た。

-城新会事務所 -

黒塗りの高級外車がいくつも停まり、いかついお兄さん達がつらつらしているいかにもなビルに、四季は単身で乗り込んだ。

「幹部を出して…!」

「ああ?…ここはお嬢ちゃんの来るところじや…」

四季は茶化す190cmオーバーの大男を素早く捩じ伏せる。

「時間が無いの……」

「お、奥の部屋だ……」

四季は並みいる野郎どもをかき分け、奥の扉を蹴破った。

「なんだ!? 騒々しい……」

奥にいたのは四季のイメージとは違い、だいぶ若かい組員だった。

「あなたが幹部?」

「まあ……この事務所じゃあ一番偉い。」

男は小バカにしたように、椅子に深く腰をかけて反り返った。

「剣崎つて幹部知つてんな?」

「ああ知つとるで、女泣かせたら世界一や。」

「どこにいる?」

「知らん。そういうやあ今日は見とらんの。」

男は薄ら笑いで椅子をぐるぐるしている。

「家は?」

「知つとるで。」

「なら連れていく。」

「ああ?」

「もしかしたら女に殺されてるかもしねないらしい……」

「なつ……つていうかお前誰やねん……」

「いいから早く!!」

「かあー……しゃあねえなあ……おい車回せ……」

- 羽田空港 -

バスは東京駅からおよそ一時間で、空港のロータリーに着いた。

次々と乗客が降りる中、れいは必死に月島を追いかけた。

月島は一旦散に国際線ターミナルに向かう。

後一步で出国ゲートといつとこりで、れいは声をかけた。

「月島さん……」

月島はビクッとして振り返る。

「あなた、剣崎さんって構成員、殺しましたね？」

「な、何を？」

力無い否定は肯定に等しかつた。

「あなたのそのアウターの袖、血がついてます。それに、隣座つて
氣付きましたが、貴女から僅かに硝煙の臭いが…」

「でも残念…それだけじゃ私が殺した証拠にはならないわ。」

「…」

れいは思わず口ごもる。

「フフッ…残念ね…ツイでない人生だったけど…やつとラッキーな
ことがあつた…それじゃあね…」

ボストンバックを抱え、歩き出そうとする月島の腕をれいは掴んだ。
もう片方の手には携帯が握られている。

れいは黙つて携帯をハンズフリーにした。

「もしもし…四季です!!世田谷の剣崎の自宅にて、腹を撃たれた
剣崎本人を発見…まだ息があります…それより…剣崎…自分で
…撃つたと…言つてます…」

月島は目を見張つた。その目は赤く充血し、頬を涙が伝つていた。

「何で…何でよ…」

「…罪深き男が初めて本気で愛した女性だった…」

「そんな…私…私…」

月島はれいにすがるようにしそのまま泣き崩れた。

- 国内線出発ロビー -

「にしても、何事件解決してんすか！まったく、警察に事情聴取な
んかされてたらややこしく…って聞いてねえよ…」

源三が振り向くと、れいは四季に電話していた。

「ありがとう。助かったわ。」

「いいんですよ。それより何でわかつたんですか？彼女が何かした

つて……

「彼女の目よ。彼女、望まず人を殺した目をしていた……世界中にいる少年兵と同じ目。」

「……あつ、あと、野茂瀬兄いって誰だつたんですか？ただの情報屋には……」

「反対から読んでみなさい。」

「反対？……一セモノ……」

「フフッ……そういうこと。偽札、偽ブランド、それに”偽造パスポート”……ありとあらゆる偽物製造に精通してゐる人よ。」

「なるほど、ようやく納得できました。ではお嬢様、まだ仕事があるので失礼します。」

「わかつたわ。気を付けて。」

れいは電話を切つて、二人に向き直つた。

「さ、行きましょ。」

「目指すは北の大地北海道！！」

「銃……持つてて平氣なのか？」

「ええ、右から三番目のゲートは協力者よ。」

れいは自信満々に歩き出し、二人も後に続いた。

さらにつの後ろを数人の男女がつけている。

「……はい……少々のハプニングはありましたが……予定通り……大丈夫……

ヘマはしません……必ずや”鉄の鳥”を”空の木”に……」

「…………ん…………げ…………」

誰かが俺の近くで何かを言つてゐる。

「…………げ…………ん…………げ…………」

ああ…………この声は…………。

どこまでも深い湖に沈んでいくかのようにスースーとまどひの世界へと落ちていった。

81

今日の授業は朝からの体調不良も災いしてか、やたら長く感じられ、帰り道はどつと押し寄せる疲労を体中に背負つてひたすら帰宅していた。

ふと上を見上げるとさつときまでの澄み渡つた空はいつの間にか暗く濁んだ雨雲に覆われている。

雨を恐れて家路へ向かう足が自然と早足になっていたせいか、気がつくと「火村」と表札が掲げられている見慣れた自分の家の前に着いていた。

(ガチャ)

玄関の戸を開けるとまざ異変に気が付いた。

真っ先に田に入るには靴や服が散乱した室内。床は誰かが土足で上がりこんだかのように砂にまみれていた。

「…か…母さん？」

呼びかけてみても自分の息遣いまでが家に響き渡りそうなほど、恐ろしい沈黙が返ってくる。

その刹那、自分の心臓の鼓動がドクンと音を立てるかのように跳ね上がった。それから全身に嫌な悪寒が走り体がガタガタ震え、込み上げる吐き気を両手で抑えこむ。

玄関から進もうとしない自分の足を数回叩きそのまま恐る恐る廊下の奥まで進んでみると、やはりそこはこいつもの部屋がまさに地獄と化していた。

壁やテーブルなど白を基調とした物が多いリビングルームは絵の具の赤で塗りたくつたように血が付着していて、部屋の隅にあるすずらんの花にまでそれは掛かっていた。

そしてこの部屋で一番目立つのはやはり自分の眼下に転がっている父と母の姿だ。2人は苦痛に歪む顔をしつつ体を銃弾で蜂の巣にされていて部屋中の血痕は彼らによるものであるのは疑いようもない。

映画のようなあまりにも現実離れした目の前の現実に俺はその場でへたり込んで、ずっと耐えていた喉につつかえているものをすべて吐き出す。口元を袖で拭つてから、

無意識に悲痛の叫びを発した自分に驚くこともなく、とにかく頭が真っ白だけどパンクしそうで、出るはずの涙は現実味がないせいか、ちっとも瞼には浮かばなかつた。

そんな時不意に玄関を開ける物音がした。

それに反応するのも遅れ警戒する前にリビングへと入る扉が開かれ
る。

(バタン)

「チツ遅かつたな。四季、一応2階も見てこい」

「はい、
お嬢様」

銃を持った四季という名らしい少女は指令を受けてから俺には目も暮れず廊下に戻り2階へ続く階段をスタッカート登つていく。それから指令を出していったもう一人、セーラー服にトレーンチコートという変わった容姿の少女と目が合う。

誰だかわからない奴がいきなり家に入ってきたなんて当然の如く警戒を強くする。

「君に」の息子？」

「……」

「当然の質問だつたので俺が訂正しないのを肯定と受け取つたのであら」
「ふーん」とでも言つよつて何回か首を縦に振つてから、

「これはな今私達が戦つている組織の仕業。多分なんらかの形でご両親は関わつてしまつたのだろう。私達ももう少し早く突き止めて追つていれば……クソッ」

死体を見ながら彼女は淡々としていたが最後は後悔も滲ませた口調で呟いた。

少しの沈黙が訪れる。

それを意外にも破つたのは俺だつた。

「なあ……戦つって、一体あんた達は何と戦つてるんだ……」

なんでだろう。お前ら誰なんだとか両親を殺した組織はなんのかとかそんなことを頭で考えていたのに真っ先に口に出たのはこれだつたのだ。

それを聞いた彼女はその虚ろな眼まなこを俺の目へと向けてから少し俯き

口を開いた。

「戦うのは勿論敵だけど……もつと…大切なにかのためだな。そのために私達は引き金を引き続けるしかないんだ。この世界に」

彼女の見た目は「よく普通の少女であるが故の儂さもあるが、その反面表情には強さが満ちていて凜々しい顔をしていた。

それを見て俺は

”ああ、美しい”

ただそう思った。

「2階見て来ましたが何もありませんでした」

四季という少女が戻ってきて彼女に報告する。

「そうか、ひとまず…戻ろう。君じゃあな」

彼女がそう言つて一人は俺に背を向け歩き出す。

「……待てよ…」

不覚にも離れていく彼女達に声を掛けてしまつ。

?を浮かべながら振り返る一人に言葉を続ける。

「俺も……俺もお前達についていきたい！」

俺はなぜこんなこと思つたんだろうな。
無意識に大きくなつた俺の声を聞いて彼女達の表情は驚きを隠せなかつた。

「えつ君いきなりの入隊希望？」

四季が先程とは違ついかにも女の子な口調で話す。恐るべくこれが“素”であろう。

俺がしつかり頷くと、もう一人の彼女が俺を厳しい表情で見つめる。

「なんで君は”ウチ”に入りたいと思つたの？」

その虚ろな目がまた俺の顔を射抜かんとばかりに見つめてくる。
だが俺も拳を握り決意を固めて彼女に対抗するように見つめ返し口を開いた。

「俺は両親を守れなかつた。知らなかつたとは言え、今は後悔でいっぱい。でも俺なんかただの高校生で無力なのは自覚してるけど決めたんだ。これから少しでも人を守れたらって…。だから俺はあんたにこの命捧げるつもりで守り抜いてみせるよ」

未だ眉間にしわを寄せていた彼女だったが突然口元を緩めて、

「フフッ 君面白いね。でも守りたいって言つたつて私達は戦うのが仕事。人を殺すのなんて当たり前だけど、君にその覚悟はある?」
もつ迷いなんてない。

「俺はあんたを守るって言つたろ」

例え世界があんたを否定しても……

「君名前は?」

「火村源三」

「源三か、じゃついてこい」

「ああ」

「私は御凪れい。れいでいい」

「わ〜い新入りだね!私は四季!よろしくね」

この家の扉を出たら違う自分が始まる。不安も多いけど一度決めたらもう振り返らない。

外はさつきの曇天が嘘みたいに綺麗な月夜が広がっていた……。

「……」

気がつくと席が沢山並んだ閉鎖的な空間が視線に広がり、耳には「ゴー」というジゴット音がかすかに聞こえていた。右をふと見れば小さな窓から白い雲のようなものが覗いて見える。

ああおういえば今飛行機の中か。

うつかり寝てしまつたようだ。

「うわー

左を見ると享一が俺の顔を覗き込むように見ていたので声をあげてしまつ。

「なんだよ」

「… やつを…… うなされてたぞ」

どうやら心配してくれたらしい。

「ああそりか? いやそりどもないよ」

?マークを浮かべる享一の更に左を見るとれいも目を閉じ寝息を立てていた。

それにも今まで色々なことがあつたが全てれいの存在が大きかつたと思う。ただでさえも人を殺さないリーダーだかられいの身になにかあると自分を制御できない。それがこれから反省点だな。

とにかく……

”いつもありがとう”

そう彼女に向け心の中で囁いた。

「当便はまもなく新千歳空港に到着いたします。シートベルトを着用になつて……」

もつ書くことはこれだけです。

本当に遅くなつて、ermenなさい…………

急ぎ過ぎて文面変です。

本当にすみません。

源三過去簡単かな。なんて調子こいたらどんどん変になつていきました。矛盾点は……うん。クレームつけてください

最初源三を呼んだのはれいです。寝たらつまらぬーよ、みたいな友達と外泊した時みたいな感覚だと思つていただければ幸いです。

なんの問題もなく空港を後にしたれい達はいま貸し切りのバスの中にいる。

「そろそろ人目につくところにでるから銃とかしまっておけよ……」れいの言葉を聞いて享一、源三は自分の銃の手入れをやめて、窓から外をのぞいた。

「すゞ…！」

「おお……」

上から源三、享一である。

窓から見えたのは巨大な鉄の塔。東京ス○イツリーに対抗してここ北海道で作られている北海スノーサリーだ。今でさえ馬鹿でかいのにこれで作りかけなのだから完成した時の大きさは想像できない。「ふふ、さすがに壯觀だな。しかしこんなものを作つて何になんのやら」

「そう言つてやんな、れい。権力者は高いところが好きなんだよ、きっと」

「あつそ」

「……、興味なさそうだな、おい」

「そんなことはない。ただたんに知的好奇心が沸かないだけだ」

「同じことじゃないか? まあいい、それよりも腹が減つた、そろそろ飯の時間だろ?」

「そうだな、目的地に行く前にどつかで食べるか」

そう言つて財布の中を探るれい。そして固まる。

「あー、すまんが源三。お前、飯抜きでいいか?」

「いやいやいや、無理ですって! 僕も腹ペコだよ…!」

「なに、人間1日なにも食わなくとも大丈夫だ! まだ未成年なんだ、少しごらい体に悪いことをしても大丈夫だ!…!」

「うそだーー!」

結局といふか、やはり源三はれいと享一が食べているのを見ているだけになつた。

「うう、おい！ 一之瀬享一！ 先輩を優先するのが普通じゃないか！？」

「わかった、わかったからそんな情けない声をだすな……」

そう言つて享一は手をつけてないポテトサラダを源三の前に押した。

「あっ、じゃあ私のトマトとブロッコリーあげるーー！」

「おお！ 豪華なサラダだ。それじゃあ、俺のトマトもやひつ。よかつたな、先輩？」

「うう、覚えてるよ。食べもののが恨みはすここんだからなー。文句を言つながらもサラダを食べる源三を見てれい達は笑つた。

「さて、腹も膨れたとこで目的地に行くか！」

そう言つて席を立つれいに続くように享一達も席を立つ。支払いを済ましバスに乗り込み、れいが運転手に耳打ちしたあとすぐにバスは発車した。

「なあ、どこに行くんだ？」「着いてからのお楽しみだ

「あつそ」

「うおおおい！ もうちと食い付かないかな、一之瀬君？」

「かまつてほしいのか？」「う、うるさいーー！」

そう言つて享一の頭をぽかぽか叩くれい。

バカッフルがイチャイチャするようにみえるのは源三だけでは

ないだろ？。

数分後、目的地付近。

「ここになにがあるんですか？」

目の前には巨大な鉄の塔があった。そう、北海スノーツリーだ。
「んー、ちょっと人と待ち合わせしているんだ」

「こんなどこでか？」

「ああ、いいから黙つて私についてこい」

バスから降りてどうどうと立ち入り禁止の看板の横を通りすぎる
れいに少しの不安を覚えるものの享一達も立ち入り禁止の看板の横
を通りすぎた。

北海スノーツリー 現在の最上階、八十三階。

「気をぬくなよ、源三、享一！」

れいがそう言い終わると同時にエレベーターのドアが開く。
そこにいたのはクモのマークがはいったスージースをもつたサ
ラリーマン風の男だった。

17・未成年も頑張ればなんでもできる……！

（後書き）

短くてすいません…。

時間は遡り、羽田空港・国内線出発ロビー

「どうぞ、お進み下さい。」

形式だけのチェックを受け、れい達はゲートを潜り抜けた。

「本当に大丈夫だつた……。」

享一はれいの顔の広さに少し関心した、少し。

「だからって自分の世界に入り込んで弄り出しちゃダメよ。れいは口角を目一杯上げて忠告した。

「そういえばれいさん、何で北海道なんかに？」

またも蚊帳の外にされていた源三が背中越しに尋ねた。

「スパイダーの社長とコンタクトが取れてな。めつたに表に出てこない奴だから会つてみたかつたんだ。」

「そいつから近江の情報を？」

「さつすが一之瀬君、その通りよ。」

スキップしながら通路を進み飛行機を目差すれい。はしゃがないでください、と仕付けける源三。

その二人を眺めて享一は、兄弟がいたらこんな感じなのか、と頬を緩めた。

「追うぞ。」

異様な雰囲気を放つ男女数人はれい達の後を追つてゲートに進もうとしていたが、その行く手を阻む者が現れた。

「すみません、ちょっとといいでですか？」

青い服に特徴的な帽子からして警備員だらう。

深々と被つた帽子のせいで顔が見えないのが少し不審ではあったが。

「ちょっとご協力いただけますか？」

そういうて警備員は半ば強引に男女達を誘導した。

「ちゃんと飛行機の時間考えてくださいよ？」

長い前髪で顔の上半分が見えないリーダー格の男が冷静に言った。

他に男が一人、女が一人、皆黒いスーツを着ている。

「お時間は取りませんから……。」

そういうつて警備員は彼らを隔離された一室に連れ込んだ。

「で、何の用ですか？」

今度は唯一の女が口を開いた。女性らしい高く透き通る声だ。肩に触るくらいの黒髪は直毛とは言えないが彼女によく似合つている。

「用件は簡単だ。」

警備員の口調にそれまでの優しかった面影は微塵も感じられなかつた。

「お前らが誰だかは知らないが、れいさんには指一本触れさせねーぜ？」

警備員は帽子を脱ぎ捨てた。茶色がかつた短い髪にスポーツマンの顔立ちはイケメンの部類だらう。

「……貴様、何者だ！？」

四人の中で一番背の高い長髪の男が口調を荒げて言った。

「俺か？……なら覚えとけ、俺の名前は……一村透だ！」

「あー、疲れた疲れた！」

「警備員なんて突つ立つてるだけですもんね！」

休憩時間に入つた二人の警備員が自動販売機で買った缶コーヒーを片手に通路を歩いていた。

「ここは空き部屋かな？」

（がちや）

先輩警備員が扉を開けると……。

「うわああーーーー！」

「どうしましたかーーー？」

後輩警備員が慌てて中を覗きこむと血だらけの男が一人、壁にもたれ掛かっていた。

「だ、大丈夫ですか！？」

後輩は腰を抜かす先輩を押しのけ男に駆け寄った。

「……行か……せるな……。」

男は掠れる声で訴えた。

「誰ですか！？」

後輩は必死に耳を傾けた。

「新……千歳……。」

その言葉を最後に、男は重力に従つて俯いた。その右手には赤く染まった携帯が握られていた。

「申し訳ございません！そちらの便は既に当空港を離陸してしまいました。」

係員の女性は何度も頭を下げている。

「どうする、このままじゃ……。」

長身の男は青ざめた顔でうろたえる。

「分かっている。……次の便に空きはありますか？」

「少々お待ちください。」

女性は手早くパソコンをいじり始めた。

「奴らがスノーゾリーに行くことは分かっている。なら”鉄の鳥”の行き先を”空の木”から”雪の木”に変える。」

リーダーは腕を組みながら呟いた。

「でも、タイミングよく奴らがいる時に衝突させられるか分からな
いわよ？」

女は心配そうにリーダーの顔をつかがつた。

「……。」

「とりあえず次の便の空き次第だな。」

背の低い童顔の男が場を取り繕つた。

「お待たせ致しました。空席が確認できました。」

「場所はどこでも構わない。四人分お願ひします。」

「わ、分かりました。直ぐにチケットを発行いたします。」

機内

「で、どうするの？」

女の名前はエリ。モデル並の顔立ちとスタイルとは裏腹に、様々なテ口の第一線に立つてきた。

「いいこと教えてやろうか？」

童顔の男はジン。張り付いた笑顔は人を殺す瞬間のみ、自然な笑顔になる。

「何だ？」

似合わない無精髪を生やした長身の男はカラ。

「ターゲットの腰巾着の一人に発信機をつけておいた。」

「そういうことは早くいいなさいよ！」

エリは素早く突っ込みの一撃を脇腹に入れる。

「ならとつとと場所を調べてくれ。」

リーダーはハル。四人とも列記とした日本人だ。

「はいはい。」

どこでも構わないと言つたが向こうが気を利かせてくれたのだろう、四人は固まつて座ることができた。

前の二席にエリとジン。後ろにカラとハルが腰を下ろす。

「にしてもさつきの男、威勢のわりに弱かつたね。」

エリは警備員に成りすましたターゲットの仲間を思い出した。

「そうとうな怪我を負つていたんだろう、体の動きが不自然だつた。」

「ハルは腕を組んで目を瞑っている。

「大人しくしていればもう少し長生きできたのにね。」

「…………。」

カラは寝息を立てていた。ハルもそれ以上は口を開かない。

「つまんないのー。ねえジン、まだ調べ終わらないの?」

「…………終わった!」

携帯電話に似た機械の画面には地図が映っていた。

「教える。」

ハルの言葉に対してエリは口を尖らせた。

「移動中のようにです。この速さは……車ですね。行き先はおそらく

”雪の木”でしよう。」

「…………この飛行機を乗つ取り、”雪の木”に追突させる。…………行くぞ。」

ハルの言葉を合図に、四人は立ち上がり操縦席を目差す。

飛行機は轟音を立てながらどんどん高度を上げていた。

雲の上はそれまでの曇天からは想像もできないほど太陽の輝きで満ちていた。

「ちょっとお待ち。」

後一步というところで狭い通路を塞ぐ邪魔者が現れた。

漆黒のロングコートを着た包帯だらけの冬着男と、ミニスカートにノースリーブの夏服女だ。

「死にたくないければそこを退け。」

ハルの眼光が二人組みを威圧する。

「そうはいかないのよう。だつてあなた達、コレを突つ込ませる気でしょ?」

オカマ口調の男は小声で言った。

「透さんの最後の声、聞かせていただきましたから。」

オカマの横にはモデル級のエリが霞むくらいの美女がいる。

貴様らもれいの仲間か

ジンが一步前に出た。そのスーツの袖口には拭き取りきれなかつた血が滲んでいる。

「私は田比野吾郎、あなた達を食べる乙女よ。
妹の万由です。」

田比野三姉妹(?)の三人組で唯一の正常者にして内面、外見ともに完璧なのがこの万由だ。

「邪魔をするなら貴様らも消すだけだ。」ジンは懐に手を伸ばした。

行一

ハレは吾郎の目の前立つた。

（六九）

不意に重い鉗声が鳴り響いた 乗客は無言のままノルマ達を見詰める
「う、うう……うふふふふ、あつはっはーーー！」

吾郎の左手から零れた銃弾は床を転がった。

新編 金華山志

パーティクになつた。

井戸をめぐらす
前編

ハルが仲間に見

「**排除します。**」

「くそがつ！」

ハルは両手に『ザートイーグル』を構えて引き金に指をかけたが……。

（ガチヤ ガチヤ ガチヤ）
ハルは目を丸くして固まつた。一瞬にして浮かんだ額の汗は頬を流

れて顎から落ちた。

慌てふためいていた乗客の全ては多種多様の銃口をハルに向けていた。

「あなたは私達を甘く見ました。その報いを受けてもらいます。」

万曲は感情のない声で言うとナイフをハルの首筋につけた。

「でもその前に、あなたの知っている情報を話してもらいます。」

「い、言つわけないだろ。」

その声と腕は震えている

（アーネスト・ガッキー）

万由の手から滑り落ちたナイフはハルの左足に突き刺さった。

「あなたの知つて一の情報を話してもう一并す。」

アガルの矢一に、性軽不謹一に、うしろにまつて、

万田はミニベガードの口から次のページを取り出して再び首筋に受けた。

ハルは銃を手放し、大人しく万曲の書うことに従つた。

「パイロットさん、このまま北海道に行っちゃってくださいーー！」

吾郎はハルを讃め回すような目で眺めながら無線

「おに……お姉ちゃん、透さん大丈夫かなあ？」

万由の顔は美人かつ可愛い完璧な顔に戻っていた。

「あの子が簡単に死ぬはずない。助けに向かってゆりちゃんと七君がきつと何かしてくれあるつ！」

がさへ作るかに一々れるれ

取り戻した。

しかし、捕まつたハルにとって地獄の始まりだったことは言つまでもなく、その光景はまたの機会にでも……。

時間は戻り、北海スノーツリー現在の最上階・八十二階

「あなたが情報屋スパイダーの社長さんですね？」
れいは完璧な笑顔と敬語で男との距離を縮め始めた。

「初めまして。御凪れい様とその優秀な弾丸たち。私が社長のオオジヨロウと申します。」

「オオジヨロウ」について

名前の由来はオオジヨロウグモ。

南西諸島（奄美大島以南）に住み、6～10月に姿を現す日本最大の蜘蛛。

体長はオスが7～10mm、メスは35～50mm。

円網（いわゆる蜘蛛の巣）は大きいものでは2mにもなる。

スパイダーの社長なんで蜘蛛に関連した名前にしたかつたんですW

-スノーソリー 83階 第一展望台最上階 -

幾つかのガラスの取り付けが終わってない窓から忍び込む、真夜中の冷たい風が密やかに集まつた悪人供の類を撫でる。

実は建設途中とは名ばかりで、不況の煽りをモロに受け、ここ一月”マトモな人間”の出入りは無い。

「で、情報つて何？」

「大したものはありません。次のミッションに彼らの末端構成員が関わっているということ…」

オオジョロウは窓の外の満天の星空を眺める。

「…確かに次のミッションは道立光陵高校の…」

火村の言葉をれいが遮つた。

「それだけか？まさかそれだけの為に自ら赴きはしないだろ？」

れいは探るような視線を投げ掛けてみたが、オオジョロウは一切目を合わせずに、北の空を眺めたままだつた。

「今日も北の大地は星が綺麗だ。…そだあの星はなんと言つたかな？」

そう言つてオオジョロウはぼぼ水平に指を指した。その先では確かに何かが光つてゐる。だが決して星でないことはわかつた。

「…何だあれは？」

その光はだんだんと大きくなり、それに伴い低く重たい羽音が聞こえだした。

「なるほど、警察に…」

そう言いかけた火村の声に被せるように、享一が口を開いた。

「…違うな…あの音は…タンデムローター…」

「…じゃあ自衛隊…」

「それも違うわね…」

またしても火村の言葉をれいが遮った。

「あの音…チヌークとは、西側のヘリとはちょっと違う…そうね東側の…Yak-24と言つたところかしら…ところとは”かの国”の生き残り”つてどー?」

「御明察!さすがは御屈れいだ。だが君は少しばかり有能過ぎた…ただ”仕事”をこなし続けていれば良かつたのに…」

オオジヨロウは小馬鹿にした笑みを浮かべる。

「…貴様…裏切つたのか?」

火村が問うと、オオジヨロウの顔はさらに下卑た笑みに変わった。勘違いするな。元の理念に基づいているのも、”クライアント”の言つことを聞いているのも私の方だ。違うか?御屈れい!!--火村と享一は驚いてれいを見た。れいは俯いたまま黙つている。

「一体…どういうことですか?」

詰め寄る火村をれいは相手にしない。

「私達はちゃんと仕事をこなしているつもりだ。」

「ではなぜお嬢を殺つた!!そんな仕事を頼んだ覚えはない!!」激昂するオオジヨロウだが、れいは臆することなく続ける。

「だとしたらあのじやじや馬の手綱をしつかり持つていれば良かつた。クライアントにも言われている…邪魔者は殺せと…」れいは眼光鋭く睨み付ける。

「しかし!!」

「それよりも……これはクライアントの命令なのか?そんな筈はないよな?だとしたら、こんなクライアントと縁も所縁も深いところで殺るはずがない…むしろ…」

「俺達と一緒にクライアントを葬る…オオジヨロウ…お前の”反乱”だな。」

良いところを奪つたのは享一だつた。その手にはなぜかまたコルトガバメント砂漠迷彩モデルが握られていた。

「…だからなんでやねん!!いい加減自分の使え……つてかいつ抜いた!??」

「コントはそんなもんでいいか？」

「コントをしてるつもりは無い。」

享一は冷たく言い捨てた。

「まあいい…私にも理想の一つや二つはある。そのためにあの御方の下についた。だが、あの御方の”理想”は綺麗過ぎた…リーダーはもつと黒くなれば…おっと、お喋りの時間はここまでだ。私はここで失礼する。」

オオジヨロウは右手を挙げると、手に持っていたスイッチを押した。するとこの階の窓という窓が粉々に弾け飛び、吹き込む風がより強くなつてガラスの雨を降らせる。

オオジヨロウは、近くに置いてあつたリュックを背負うと、窓から飛び出していった。

「何…？」

窓に駆け寄り下を覗き込むと、オオジヨロウはどこぞの怪盗のように真っ白なハンググライダーを広げて飛び去つて行った。

「チツ…」

享一はハンググライダーに銃を向けたが、それをれいが押さえる。

「無駄弾は使わない方が良い…来たわ…！」

三人は窓から上を見上げる。塔の上に丁度古めかしいヘリが着いたところだった。

「急いで下りるよ…！」

三人はれいを先頭にして階段へ走る。

階段を下り出すと同時に、リペリング降下してきた敵が突入した。

「走れ！走れ…！」

「ちょっと待つた…」

享一はピタッと止まり、階段の防火扉閉めて、何か黒い塊を取り付けた。

「何なのよ…？」

「reiが尋ねる。

「ブービートラップだ。ちょっとは時間を稼いでくれる。」

「OK? 行くわよーー！」

-スノーツリー 75階相当階屋内階段 -

走り出してしばらくすると、上方から腹に響く低い爆発音がした。
「良かったわね、ブービーなヤツがいて！」

「でも、階段は他にあるんじゃないですか？」

「あるに決まってるじゃないーー！」この屋内の階段の他に、屋外に二つ！！」

「つていうことは…」

「こうやって前から突然出てくるーー！」

れいは叫んでから急停止した。追い抜かし様に火村と享一が連絡通りのドアから出てきた二人の男の頭をぶち抜いた。

「早くドア閉めてーー！」

二人は慌てて階段の左右についたドアを閉じた。

すると、ドアの向こうから無数の銃声と、ドアやタワーの鉄筋に銃弾が当たった甲高い音が聞こえた。

「ブービートラップでどれだけ殺つたかわからないけど、この階段では追いかけてこないみたいだから少し休みましょう…」

れいは息が上がりてしまい、全力で坂を駆け上がる謎の番組のように、呼吸が色っぽく艶かしくなっていた。

「確かに、銃弾じゃあビクともしなかったですからね。この扉。それこそRPGでも持つて来なきや…」

「シッ！ 静かにーー！」

享一は口の前で人差し指を立てるジェスチャーをしてから、そつとドアに耳をつけた。

「…一人…他より足音の重たいヤツがいる…」

「…おいおい嘘だろ…」

「…源三が噂なんかするから…」

「俺のせいツスカーー？」

「なんでもいいから急いだ方が良い！！」

「しょうがないわね…」

れいはフラフラと立ち上がって、また階段を駆け下り始めた。それに火村が続き、享一が後衛を務める形になつた。

再び階段を下りだして、すぐにまたあの低い爆発音が階段に響き渡つた。

「…本当にやりやがつた…」

火村が思わず立ち止まる。

「傭兵風情が…」

享一は立ち止まつた火村を突き飛ばした。

「早くしなさい！私が走れるうちにちょっとでも下り…れないみた

い…足音がかなり近いわ…」

「迎撃戦闘か…嫌いじやない…」

「俺も…」

「いや、二人は先に降りろ。俺が時間を稼ぐ。」

享一は階段のカーブに身を隠し、持つていたボストンバッグからベレッタM92、MP7、P90と大量の弾倉を取り出した。

「早く行け！！」

「まだ最終回には程遠いわ。」

「死にはしない。」

「フフッ…わかったわ。一之瀬君に任せる。」

「死ぬなよ…」

れいはくたくたになつた足を叩き、一歩一歩踏みしめて階段を下りていつた。

その後にコルトガバメント雪上迷彩モデルを構えた火村が続いた。

「ふう…殺るか…」

享一はP90を手に持ち、敵が近づくのを待つ。

次第に大きくなる足音、やがてそれは一つ前のカーブを曲がつた。

「フッ…楽しもうぜ！…」

享一は陰から飛び出すと、敵兵に向けて目一杯引き金を引く。

P90から放たれ続ける銃弾は、駆け下りてきた男達を次々と死体に変えていった。

弾倉に詰まっていた50発もの弾丸は、ものの三秒で撃ち終わった。また階段の陰に入り、弾倉を取り換える。すると、生き残った敵が銃撃が止んだのを見計らい、享一に向かい手榴弾を投げ付けた。

-スノーゾリー 40階相当屋内階段 -

必死に階段を下りる一人をまた爆発の衝撃波が襲った。

「あれからもう三回目…大丈夫ですかね…」

「仲間を信じる源三…それより…もうすぐ連絡通路だ…」

火村は一旦止まってから、銃を構え直してドアを警戒する。れいがあと少しで通り過ぎようかというその時、ドアが勢いよく開き男が転がり込んできた。

火村はすかさず引き金を引いたが、弾は男の頬を掠めて階段の壁に当たった。

「…よせ…撃つな…」

男はそう言って顔を上げた。

「一之瀬君…！」

「一之瀬生きてたか…良かつた…」

「とりあえず目に映った敵は殺してきた。けど…」

享一は服の袖を捲ると、腕の皮をベロンとめくつてみせた。

「ちょっと怪我した。」

「はうあああ～寒気がするから早くしまつて…」

「死体は平氣なのに…」

「だつて死体は死んでるじゃない。」

れいは訳のわからない理論を自慢げに話した。

「それよりどうしよ？…日比野君…じゃない日比野ちゃんは来てないし…」

「いや… 来てる… やつをから寒気が止まらない。」

「酷い判断方法ね…」

「とにかく下りましょ。早くしないと夜が明けてややこしくなるよ。」

「やうね。行きましょう。」

ひつひつして、事件の解決に始まる激動の一夜が終わった。

「どんどんいくわよー！」

妙に高いテンションで突き進んでいく日比野姉妹（？）はスノータワーの階段を上っていた。

「おにい、お姉様。れいさん達はまだここにいるんでしょ？」「いるに決まってるでしょー！　じゃなかつたらこんな爆音が聞こえるわけないでしょ？」「

「確かにそうですね…」

姉妹（？）の会話も束の間。銃声が大きくなる。

「万由ちゅうああんつー！　行くわよおおんつー！」

五郎の奇声と共に走る速度が速くなる。

れい達は角を曲がり数メートルの所にいる。が、オカマもとい五郎は行くのを躊躇していた。理由は突然声をかけて、敵と間違えられて撃たれる可能性と、彼らがこっちに気をとられているうちに敵に撃たれる可能性があつたので日比野姉妹は気配を消して銃撃戦が一時的に終わるのを待っているのだった。

しかし、れい達のところに行つたところで役にたつのが今五郎の頭にある疑問だった。万由は右手に銃を握っている。五郎は無駄にでかい鎌しかもつていない。つまり、五郎が行つたところで守る者が増えるだけではないか、と。

「お姉様、止んだみたいですよー！」

「わくあつたわああつ！　万由ちゅうあん行つてー！　私はここで後ろ見張つてるからああつー！」

「わかりました！」

やりとりを終え万由はれい達のところに駆けていった。

「さて、皆が終わるまで一人ねええ。なにしてましょ？」「

五郎達が来た道から数人の足音と鉄と鉄がぶつかる音がする。敵は重装備らしいのがわかる。

「ふふ、おバカな奴らね。武器が多いほうが勝つとも思つてるのかしら?」

実際武器が多いと動きが鈍くなる。しかし利点もある。弾がなくなった時に攻撃の手がなくなる心配は少なくなる。

しかし、五郎のまえでは欠点が目立つてしまつ。五郎は常人では田でおうのがやつとのスピードで動くのだ。そんな動きをする相手にするには重装備をするのは馬鹿としかいいようがない。

「きしえええつつ!…」

三人の男は案の定何もできずに頭と胴体が離れてしまつた。
「まつたぐううつ。もつ少しちゃんと鍛えなさいよおおつ!…」

「れいさん! 万由です!…」

「一之瀬君、仲間よ!」

享一は万由の足音が聞こえてきたほうを見て、銃口を向けていた。れいの声を聞いても少しの間銃口を下げなかつた。

「はあ、万由は五郎、千歳姉妹(?)の本当の妹だ。正真正銘仲間よ」

「日比野の…?」

享一が驚くのも当然だ。

「五郎お姉様も来てしますよ」

「そうなのか…」

「ちよつ、五郎が生きてるんですか!…?」

「言つてなかつた?」

「聞いてませんよ!…」

「ああ、もう! いちいち大声をだすな!… 撃たれるぞ!…」

撃たれるぞ!…」

「まかせてください。ここにいいものがあります」

そういうて万由が取り出したのは三個のMK3A2手榴弾だった。

「どうしたんだ、それは？」

「え、ああ。七弥さんから借りてきたんですよ」

そう言いながら手榴弾を敵のほうに投げる万由。直後、爆発音と数名の悲鳴が聞こえた。

「さあ、行きましょうか。れいさん

「は、はい！」

三人仲良くハモリ、万由司令官についていくのだった。

「あんらああつつー おひしづりねええー！」

ブンブン手を振る五郎を見て足を止める者が一名。

「彼が新人の一之瀬君かしら？」

「ああ、そうだ。とにかく話は後だ！ 一之瀬君さつさと来なさい

！！」

「あ、ああ

「下にお姉様のデコドラがありますから行きましょう」

万由の提案に反対する者はいないので全員下に続く階段を団指して走りだした。

先頭を階段の位置を覚えている万由。次にれいと護衛の享一が走り、源三、五郎が後方に注意を払いながら走っている。

特に問題なく二十階まで下りてきたれい一行だったが先頭を走っていた万由が急に足を止めた。

「なにしている！ サッさと進まんか！－

怒鳴るれいを無視し銃を握り直す万由。状況を理解した享一、源三はれいを連れ上の階に避難する。

日比野姉妹の前に立っているのは近江一家の若旦那、義光だ。

「なぜあなたがいるんですか？」

会話をすれい達が逃げる時間を稼ぐ。

「いや、なに。スパイダーの社長がパーティーを開くと聞いたんで遊びに来たんだよ…」

ゆっくりと、憎しみを込めて言い放つ。

義光がナイフを持ち構える。つられるように万由も銃を構え直す。しかし、五郎が万由の肩を掴み後ろにやる。

「ごめんね、万由ちゃん。こいつには借りがあるから私に譲つて」五郎がオカマ口調を忘れている。そんな五郎を見るのは初めてかもしれない。逆らうことなどできるはずもなく万由は後ろに下がる。

「一つ聞かせる。裸の蛇もどきのあの男はここに来ているのか？」

まあ、お前も瀕死か…くくく

「二村さんはここには来ていません」

万由が答え終わる前に五郎は動きだした。

「どうしてこうなった

れいは両手を胸の前できつく結び、身を潜め震えていた。

みんな死んだ。

そう、みんなだ。

一村も吾郎も六条も七弥も千歳も万由も。

みんなれいの目の前で死んだ。

彼女を護るために……

「！」

途切れるこの無い銃声、硝煙の匂い、飛び散った肉片、鮮血、たつた数秒で瞳に映る世界は紅く染めあげられた。

恐かった。

いや、恐い。

自らの命が失われる」とに対する恐怖より、自らのために散つていつた恐怖が勝る。

「　い！」

恐い、寒い、どうしてこうなった、みんな死んだ死死死死死死死死
こわいさむいやだ殺ころす殺されるやだいやだだめだ死にたくない
私のせいだ違うちがういやだムリいやだ死死し死死死死シ死死死
れい！

名を呼ぶ声でれいは世界に引き戻される。

顔を上げれば、しゃがみ姿勢で壁にもたれ一狙撃銃（M700）
を構えた享一。彼は壁から顔を出し、周囲を警戒しつつ、片手を催促するよう突き出していた。

「バックからマガジンとつてくれ

「あ……」

れいは指示通り、壁に立てかけられた享一のバックパックからマガジンを出し、享一の手のひらに乗せる。壁際に戻りマガジンを

装填し終えた享一はくるりと半回転し、壁から躍り出る。膝立ち姿勢、銃を構え引き金を引き絞る。五発必中。放たれた全ての弾丸は全て人間の急所を打ち抜き五人の人間を絶命させる。

「れい！ 次！」

れいは再びバックパック内を漁るもマガジンらしきものは見当たらない。

「もう弾がない」

享一は舌打ちを一つ。

「れい、コレ」

M700をれい渡す。

「でも、私は！」

「もつてるだけでいい、誰も撃てとは言つてない」

享一は腰から拳銃ペレッタを引き抜き、今度は壁から手首から先だけを露出し、16発。全ての弾丸を発射する。

拳銃では敵との距離がありすぎて狙つても当てることは不可能だ。無理に危険に身をさらすより威嚇に留める。

「走るぞ！」

マガジンを入れ替えスライドを引き初弾を薬室に装填。震えるれいの手をとり、バックパックを担いで敵とは逆方向に走り出す。逃げの一手。

狙撃銃の弾薬が尽きた今。逃げたところで希望が見えるわけではないが一箇所に留まるよりましだと享一は判断した。

しかし、精神的に不安定なれいの息はすぐあがつてしまつ。

「……瀬くん」

繋いだ手を引かれ、享一も立ち止まる。

繋いだままの手は膝につき、れいは呼吸を整えようと激しく息を吸う。少し落ち着くと、享一に向かつて顔を上げた。

「……瀬くん……」

れいは弱々しく呼びかける。続く言葉は容易に想像ができた。

「泣くな！」

だから享一は言葉を遮るように、両手でれいの頬を包む。れいは自分が泣いていることにさえ気がつかなかつたのか驚いたように田を見開く。

そんな田を見つめ、享一は、

「知り合つてそんなに経つたわけじゃないけど、れいは不適に笑つてるのが一番似合つてると思つ」

れいが普段そうするように不適に笑つて見せる。

「ああ」

れいもぎこちなく笑い返す。しかし貫禄は十一分。

享一は両の親指でれいの涙を拭い、手を離すと、再び手をとり走りだそうとした。

「 ッ

気配に気づいたのはれいのほうが早い、田で促されるまま振り返り、享一はベレッタを構える。

同時に、享一の額にも銃口が宛がわれる。

享一の視界の先にはコルトガバメント雪上迷彩モデル

「源三」

いつもの表情に戻つたれいは名を呼ぶ。

「生きてたのか、れい、享一」

源三は疲れた笑顔を見せ、安堵の溜息をつく。

れいの視線は源三の肩を借りて立つてゐる人物に移る。

「四季……」

四季はぐつたりとうなだれて、源三の肩から滑り落ちるとその場にしゃがみこんでしまう。

「お姉様……、雅さんが、雅さんが……」

四季の言葉にれいは俯く。しかし、先ほどのように涙を流したりはしない。

れいはしゃがみこん四季と田線を合わせ、堅く握られた四季の拳を両手で包み優しく広げる。四季の冷たい手は素直に開く。その手をとり、立ち上がらせると、れいは大胆不敵に笑みを浮かべる。

「私たちは生きて帰る」

そして、残った三人の顔を順番に見て、れいは強く言い放った。

「必ず！」

(*。。)・： ブハツ

どいつも、お久しぶりです。消炭灰介です。

ついに始まつてしましました終わりの始まり。

なんなんだ、この打ち切り最終回みたいなものは！

と思つた方、いらっしゃると思います。

いや、まあ、その、正直に暴露する制作秘話第一回戦とつきましては厳密に言えれば厳正なる会議の結果として打ち切りといえなくなくなくなくなくなくもない感じでして……。

言葉を濁すのをやめます。

ぶつちやけ、打ち切りです。

SCTメンバーの皆さんこれは言ひちゃつてよかつた情報ですかね？ なんて訊きません。言ひちゃいましたから。

とりあえず、打ち合わせどおり消炭の仕事は終わりました。詳細は業務連絡のほうに載せておきますので、後頼みます。「お、俺に構わず先に行け！」です。

今までbullet sを読んでくださったみなさん本当にありがとうございました。

この作品は私が始めた小さな作品でしたがメンバーの皆さんに愛され大きく膨らんでいきました。

自分が放つた人物たちが、世界が広がつていいくさまは見ててとても楽しく本当に嬉しい限りです。

今回は風船が膨らみすぎて針で割る形となつてしましましたが、一期一會、これをバネに『次』とかができたらなんて思つてます。

そのときは、またよろしくお願ひします。

それでは！ またいつかノシ

あ、最後にこれだけ言わせてください。

「俺たちの戦いは終わらねえぜ！」

打ち切り最終回風

22・爆弾ノ輝キハ—瞬ノ螢火ノヨウ— 有北真那（前書き）

ここでの爆弾はメンバーの一人、爆弾魔こと有北真那を指します。今まで数々の爆弾により大幅にこの物語を壊してしまいました。なので！

最後の最後に！！

特大のダイナマイトを置いていきます！！！！

誠心誠意を込めた壊し、ぜひお読みくださいまし m(—) m

四人は暗闇の寒空の中を必死に走っていた。何から逃げているのか、何処に行けば助かるのか、その答えを正確に述べることのできる者はいない。

だが、四人は走っている。失った友の命を無駄にしないために、ただ生にすがりつくように走っている。

れいは手首につけたゴムの髪止めを見つめる。万由の笑顔を思い出し、皆の笑顔を思い出してれいは目を赤くした。

万由は小さい頃から周囲からのイジメに耐えて生きてきた。理由は簡単だ。兄二人が幼くしてオカマの地位を確立していたからだ。教科書はマジックの落書きで埋まり、カッターによつてボロボロ。ノリや接着剤が塗られた椅子。自分も実はオカマなのではと疑われ、皆の前で裸にされたこともある。

しかし万由が泣くことは決してなかつた。例えどんな酷い仕打ちを受けようと、大切な家族がいる限り、その大切な人を悲しませないために、万由は常に笑顔で過ごしていた。

でもそれにも限界がきた。中学二年の夏、万由は自宅で手首を切つた。

幸い大事には至らなかつたものの、万由と、自殺の理由を聞いた二人の兄の心には大きな傷が残つてしまつた。

三人はそれから、高校を中退、中卒のまま毎日を家の裏山で過ご

した。

田舎のそこには熊や猪が出現することがよくあり、三人はそれを相手にひたすらに力を求めた。

だがある日、三人の道が闇の世界に入り込む決定的な出来事が起きた。

いつものように裏山にいた万由達は、普段と様子が違うことに気付いた。動物達や木々、空気が騒ついている。何かを拒むように、何かを伝えるように……。

突如、澄み渡る青空に向かって紅蓮の柱が昇った。灼熱の怪物は一気にその姿を巨大化させて辺りを包みこむ。行く手を阻まれた三人は一縷の希望をかけて秘密基地にしていた洞穴に駆け込んだ。

深部がL字型のようになつているここなら火も届かない。しかし三人が一番不安に思つたことは酸素だ。燃え盛る炎によつて辺りの酸素は既に底をつこうとしている。

吾郎と千歳は万由を守るように抱き締め、ひたすら熱と低酸素に絶えぬいた。

どれだけ時間が経つたかは分からぬが、三人は洞穴から慎重に抜け出した。

焼け焦げて炭と化した木々からはうつすらと白煙が昇り、山は死んでいた。その失つた命によつて開け放たれた視界の先には、同じように死んだ村が見える。

焼け崩れた家々を横目に、三人は自分の家を目指した。

すつかり姿を変えてしまつた村の生き残りは、おそらくこの三人だけなのだろう。自分の家が周りと同様に焼け崩れている光景を見て、万由はそう思つぽかなかつた。

「君達……。」

気持ちの抜けた、殻だけの言葉が三人を振り向かせる。そこには

万由と同い年くらいの女の子と、その後ろに一人の男女がいた。
「すまない……この村を、救えなかつた……。」

炭で黒くなつた顔の女の子は瞼み縋めた唇から血が垂れていた。

後ろの男女は傷だらけで立ち尽くしている。

その姿を見ただけで万由達は理解できた。この人達は何の思い入
れのない私達の村のために、必死に何かと戦つていたんだ、と。

「もう、私達は……。」

座り込んでいた吾郎の膝は涙で濡れていつた。その吾郎の視界に
男の掌が映る。

「俺も両親を亡くした。」

もう一人の女は膝をついて千歳と目線の高さを揃え、優しい口調
で男の後に続けた。

「でも、私達はまだ生きてる。どんなに辛いことや苦しいことが起
きても、生きてる限り諦めちゃダメ。」

千歳は堪え切れず涙を流した。

「無理にとは言わない。でも、もしよければ……その命尽きるまで、
俺達と過ごさないか?」

再びの男の言葉に吾郎は声にできない返事の代わりに、男の手を
両手で握り、何度も大きく頷いた。

「これ……。」

女の子は自分の髪を結わっていたゴムの髪止めを万由に手渡し、
握らせる。

「新しい家族にプレゼントよ。」

初めてだった。血のつながりのない、赤の他人からの優しさ。人
の温もり。

イジメが始まつた日から潤いを失つた万由の瞳は、この時れい、
源三、四季によつて久々に涙を流した。それは悲しみや苦しみ、絶
望をちよつぴり含んだ、感謝の涙だつた。

れいはその髪止めを手首から外し、自分の髪を結わいた。
結わきながら彼女達の最後の生きざまを思い出す。

スノーツリー 20階

吾郎は義光にむかって大鎌を振り下ろす。さすがの義光もリーチの差からか無闇に踏み込んでくることはなかつた。

享一、源三、れいは上の階につき、別の階段へ急いだ。

「お姉様……。」

吾郎の動きは既に万由が援護に入れないほどだつた。

「そんな大振りが当たるか！」

義光は吾郎の攻撃の合間を縫つて確実にナイフを当てていた。

「貴様はここで……殺す！」

吾郎は渾身の一撃を放つも、刃先は空を切つて壁に突き刺さる。

「終わりだ！」

義光はナイフを高らかに掲げ、吾郎の額を目がけて振り下ろした。激痛が吾郎の神経に乗り全身を駆け巡る。刃は寸でのところで伸びられた左手首を切り下ろした。

一撃目を放たれる前に、吾郎は左手を振つて血を撒き散らす。その血は義光の目に付着して光を奪つた。

「終わりは貴様だああ――――！」

再び振り回された鎌は義光の胴体を分断し、その勢いに片手では耐え切れず手放されて床に転がつた。

「お姉様、上……」

安堵を見せた吾郎は万由の声を頼りに上を見た。

「お前が斬れるのは所詮、俺の残像までだ。」

体の落下と共に振り下ろされたナイフの刃は吾郎の体を切り裂いた。皮膚を切り、筋肉を裂き、鎖骨を断つ。組織を引き離し、あの日の灼熱の怪物を彷彿させるかのように血は勢いよく噴き出した。義光は返り血を氣にも止めずに、刃を横に寝かせて腹部に突き刺す。肋骨をかすめたナイフは腎臓に穴を開けた。

右側に振りぬかれたナイフを追うように、さらに血が吾郎の体から逃げていく。

「まゆうう……！」

氣力だけで動かした両腕は義光の体にしがみつく。吐き出された言葉とともに鮮血が宙を舞う。

「くそつ、死にぞこないがああ……！」

義光は吾郎の背中を何度もナイフで突き刺した。しかし虫の息のはずの吾郎だが右手はしっかりと義光の後ろの襟を掴み、左腕は体に巻き付いていた。

「アアアアアアアアア……！」

万由は鎌を両手で握りしめて駆け出す。

描かれた三日月の軌跡は、一人の人間を貫いた。

「……あつた！」

源三は階段を見つけ、銃を構えて慎重に近づいた。どうやら敵はないようだ。

「ハアハアハア……！」

れいの体力が限界ということもあり、少しだけ、ほんの少しだけ身を潜めて休むことにした。

「どうしてこんなことに……。」

上の階も、下の階も、空にすら、れい達にとつての安全な場所はない。

誰が言つたかも分からぬその言葉は遠くの爆音に搔き消された。

「れいさーん！」

万由が通路を駆けてれい達を探す。

「こつちよ……。」

れいが顔を出し、万由の涙に濡れた瞳と視線が合つたその時……。

「いやああ——！——！——！」

れいの叫び声に反応した源三と享一は銃を構えて姿を出した。しかしそこに敵の姿はない。あるのはただ、何かを包み、燃やす紅蓮の業火だけだった。

「あ、ああ……。」

れいは膝をつき、手をついて崩れ、滴る涙が床に水溜まりを作つた。

「れい、これ……。」

享一は何かを見つけたらしく、拾い上げてれいの前に差し出した。

「う……うあああ——！——！——！」

かろうじて火を逃れたそれは、昔れいが万由にプレゼントしたゴムの髪止めだった。

「……ちょっと……待つて。」

れいの体力は再び底をついた。口の中は水分がなくカラカラ。喉は粘膜でベトベト。膝の筋肉は痙攣を起こしてガクガク。気温をものもせずに汗が溢れ出してダラダラ。

ヘリの回転翼の音が近づく。地面を照らすライトは四人を探して彷徨つている。

敵兵の足音はまだ聞こえない。

れいの身体はヘリの音に反応して震えだした。歯はガチガチと音

を立て、瞳は恐怖に揺れていた。

享一はれいの肩を掴んで揺すり、現実に戻そうとした。が、れいの意識は“あの時”にある。

「…………？」

男は体に激痛を覚えながら田を覚ました。靈む視界の中には見覚えのある顔。

「まだ寝てなさい。」

彼女は男の髪を優しく撫でながら言った。

「…………四季か？」

「そうよ、透君。」

一村は横になつたまま窓から外を見る。空を真つ黒く厚い雲が目一杯手を広げている。どうやらヘリの中のようだ。

首だけをゆつくり回すと、四季の横にはハ戸が寄り添っていた。その光景はまるで公園のベンチに座る恋人のじとく。

「今、どこへ？」

「北海道よ。あと数分で着くから覚悟しておきなさいね。」

今度は操縦席に田をやる。すると鼻歌を歌いながら操縦桿を握る千歳がいた。

一村はそつと瞼を閉じた。思い出せる最後の記憶は空港での乱闘まで。

あの時は、本当に死なんだと思つた。痛みを通り越し、意識が薄れていく感じ……。

でも、俺は生きていた。死を覚悟してなお、生き延びた。なぜ？

なぜ俺は生きている?

きっと……そうだ。まだ死んじゃいけないからだ。
まだ自分はこの世で終えるべき過程を果たしていないんだ。
それは何だ?

……考へるまでもない。

俺がこの世に生きる理由。この世を生きてきた理由。それは……

「眠っちゃったね。」

四季は一村の髪を撫でていた手を八戸の腕に絡ませた。

「なあ、四季。」

八戸から名前で呼ばれることが当たり前になつていて四季こといつて、名字で呼ばれると少し寂しい気持ちになる。
それは呼ぶほうの八戸も同じ気持ちだつた。

「アジトに戻つたら、伝えたいことがあるんだ。」

恥ずかしさと緊張の混ざつたような言葉。

「……分かった。じゃあさ、約束してね。生きて帰るんだ、つて。
四季は小指を顔の前に立てた。

「その約束に追加だ。」

「……何を?」

「皆で帰るんだ。」

八戸は四季の小指に自分の小指を絡めた。

「なーにこいやついてんだよ。」

眠つていてると思っていた一村は目を閉じたまま一矢ついていた。

「いやつ、これは……！」

動搖した四季は一村の頭をボカボカ叩いた。

「あ、傷口に響くっ！」

「「「あはははは！」」

「これは……！？」

操縦席の千歳はレーダーに映る敵機の数に目を疑つた。

黒くて丸いモニターの真ん中にこのヘリが位置し、その回りを緑の線が周回する。電磁波を飛ばしその跳ね返り、または敵機からの電磁波をキャッチしているのだ。

そのモニターには赤い点がいくつかあつた。

「千歳、数は！？」

ハ戸は操縦席のシートに掴まり、レーダーに目をやる。
「ざつと……10から15！！！」

千歳の返事を背中で聞く四季は積み込まれた重機を確認するが、大群を相手に生き残れる見込みは薄く感じた。

「これを抜けなきや、れいさんのところへは行けない……。」

ハ戸は眉間に皺を寄せた。

「行くつきや……ないだろーが。」

一村は腹を押さえながら起き上がつた。

「俺達は……戦うためだけに……来たんじやない。……いつだつて、勝つてきたんだ。」

瀕死状態のはずの一村だが、その言葉に宿る、その瞳に宿る意志は誰よりも輝いていた。

「それなら早く武器を準備してちょうどだい！敵さんが気付いたわよ！――！」

赤い点は徐々に距離を縮めていた。

四季は狙撃銃をハ戸に投げ渡した。ハ戸はそれをバレットM82と確認してから小銃弾をセットした。

四季は奥から風呂敷に包まれた何かを取り出した。それが擲弾銃（四季の大好物のM75グレネードランチャー）だということを3人は口にせずとも分かっていた。

「さあ、いつつちよやるわよ――――！」

千歳は操縦桿を握り直し、大群に向かつてヘリを傾けた。

「いや、千歳。ヘリを止めてくれ。」

興奮したオカマを止めたのは八戸だ。

「ここからヤル。」

八戸はドアを開き、バレットを構えた。スコープの中心には敵機の操縦士の頭が映る。

「かましちゃいなさい！！」

千歳はヘリをその場で止めた。僅かな揺れすら感じさせないホバリング、その操縦テクニックは才能としか説明がつかない。

（パアアン！！）

闇夜を駆ける一発の銃弾は無防備だった男をいとも簡単に絶命させた。

それを合図に、大群は散り散りになり不規則な動きをしながら近づいてきた。

「さあ、デカイ花火を打ち上げ……！」

「いくわよ！」

二村の言葉を遮つて、四季は引き金を引いた。打ち出された大口径の弾は着弾とともに爆発音を奏で、オレンジの花火を描いた。

「さーて、動くわよ！」

千歳はゆっくりと操縦桿を前に倒し、ヘリを動かした。

「……八戸、やつらのヘリの名前分かるか？」

目を凝らしていた二村が口を開いた。

「へり？……いや、見たことない機体だな。」

「ちょっと待つて！……あれってまさか……！？」

しかし千歳の言葉は途切れた。敵機から白煙をまといながら向かってくる弾を確認したのだ。

「しつかり撃まつてて！！」

機体は大きく傾き、急激に旋回することで間一髪、着弾を免れた。

「あれは恐らく旧ソ連製よ！」

千歳は機体を安定させながら続きを答えた。

「いつたい何で旧ソ連の残党が私達を！？」

四季は引き金を三回引いた。数秒後、夜空に再度、今度は三つの花火が上がった。

「一分かんない」とは考えるな！今は「」の場を切り抜ける」とだけ考
えるんだ！」

八戸はスコープを覗き引き金を引き続けた。狙いの定まらない発砲だったが、運良くエンジン部分にヒットしてガソリンに引火した。

千歳は再び機体を大きく旋回させた。爆発した敵機のプロペラが回転しなが

「イヤアア――――――！」

「ちとせええ――――――！」

八戸は操縦席に駆け付ける。ガラスが砕け散つたことで強風が吹き込むが、操縦桿は無事だつた。

だが、千歳の顔はプロペラによつて……。

卷之三

八戸は千歳を操縦席から引きずりおろし変わりに自分が座ろうとしたとき、その席は一村に横取りされてしまった。

お前はヘリの運転できなしたぞ」「二枚は裏毛翠に握り、ののの、二枚

めに目一杯手前に引いた。

力を入れれば入れるだけ傷口は開き、激痛が全身を駆け巡る。

うう…………ああっ！――

「残りは7機だ。……やるぞ！」

一村の顔は痛みを堪えていた。汗だくになっていた。

射していつた。

突如アラーム音が機内に鳴り響く。どうやら先ほどのプロペラが燃料タンクに傷をつけ、燃料が漏れているようだ。

「どうすんのー!?

四季は窓の向こうに宙を舞う茶色い液体を見た。

「このままじゃ……落ちる。」

一村は何度も瞬きをする。既に意識を繋ぎ止める」とやら困難なほどに、その身体は傷みきっていた。

「……たしか脱出用のパラシユートがあるはず!」

四季は重機の山からそれを見つけた。

……たつた一つだけ。

「……俺はどうせ助からない。お前らで……決める。」

一村はぐりを敵から遠ざけていく。

「……美里亜。」

「……雅さん。」

そこには音もなく、時間は止まり、ただ男女が相手の田を見つめ合っていた。

「すまない、約束は果たせそうもない。」

八戸はパラシユートの詰まつたリュックサックを四季に無理矢理担がせた。

「いや!私だけ生き残るなんて……いやよつ……」

抵抗虚しく、四季はリュックを担がせられてしまった。

「美里亜……幸せになれ。」

八戸は自分の唇をそつと四季に重ねた。

一瞬の出来事を二人は永遠のように感じ、一度と訪れない温もりを感じて涙した。

「さよならだ。」

八戸は呆然とする四季を突き飛ばし闇夜に放つた。

四季の叫び声はしだいに小さくなつていき、その姿は闇に溶けていった。

「さあ、俺達のラストステージだ。」

一村は機体をローテーションさせ、進路を敵に向かた。

「美里亜を生かすために……俺はここに全てをかける……！」

八戸は重機の山からバレットのバリエーションの一つ、XM109ペイロードを探し当てた。装填されている弾丸は空中炸裂弾だ。

「ウオオオオ——！」

発射音、炸裂音、爆発音が真っ暗な樂譜に音符を与えていく。夜空には花火が次々と咲いては散つていった。

「美里亜……俺はお前が……。」

四季からの電話で、一村と千歳と一緒にヘリでいつに向かっているのは知つていた。

見慣れたヘリが上空で戦つているところも田に入った。それが目の前で無惨に散つていく姿も、れい達は目の当たりにしていた……。

「……い……れい！」

享一の絶え間ない呼び掛けによつて、れいの意識はなんとか引き戻された。

「私……。」

れいから不敵な笑顔はまた消えていた。

「走れるか？」

享一は辺りの空に目を凝らしながら聞いた。

「ちょっと……無理かも。」

「……どうか。」

享一はれいを軽々とお姫様抱っこして走り始めた。

源三と四季はこうなることが予測できていたかのよつて、源三は

享一の前を、四季は後ろを走つていた。

れいは顔を赤く染めながらも両手で享一のシャツを掴み、その胸に顔を埋めていた。

どうも、最終章（？）の第2回（？）を担当いたしました有北真那です。

今まで私はリレー小説というものをもつと軽くとらえていました。皆で楽しく書ければいいじゃないか、と。

ですが、メンバーの中にはより良いものを書こうと頑張っている人がいたことを知りました。

私の暴走

（メンバー内では皆が「自分、暴走したわ」と思っているようですが）

は、そんな人に、本当に申し訳なく思います・・・。
読者の皆様にも、行き過ぎた内容で不快に思った方がいるかもいません。

これまでの暴走、並びに突然の打ち切りをこの場を借りて真の言い出しつべの私が代表して謝罪させていただきます。

申し訳ありませんでした。
ごめんなさい。

ですが！

物語は完結まであと少し残っています！

どうか最後まで暖かい日でお読みいただけたら、メンバー一同嬉し

く思います。

これにてbulletsでの私の仕事は終了です。
では、またの機会に……。

from・真那

北の大地の森の中で、寂しく座り込む六条と七弥の足下には、灼けた無数の薬莢が散らばっている。

六条のサイホルスターには、自前のP226が刺さり、その手には敵から奪つたAK-47が握られていた。

弾倉はそれぞれ一つずつしかない。

七弥にいたつては、ニコーナンブと一本のサバイバルナイフしか無かつた。

「…あんた…お得意の手榴弾は?」

「…もう店じまいですよ…」

「…はあ…とにかく…あの化け物みたいに動きが良いヤツ…早く殺らないとね…」

「…ですね…れいさん達に鉢合わせせる訳にはいかないですから…」

七弥は足首から下が無くなつた左足を見つめた。

「…まだ痛むの?」

「…痛い…なんて、言つてられないですよ…」

七弥は木にすがりながら立ち上がる。傷口からは血が滴り続け、何より歪んだままの表情が、その苦しみを伝えていた。

だが、れいの”弾丸”である彼らに立ち止まる暇など無い。研ぎ澄まされた第六感に任せ、敵と何より森をさ迷つてているであろうれい達を捜す。

静寂に包まれた森では、葉鳴りの音さえ煩く感じられ、訓練された敵には十二分に位置情報として伝わつてしまつ。

「…いつそ足が無くなれば静かに動けるのに…」

六条は草を搔き分けながら呟く。

「…それはそれで大変ですよ…」

七弥はひきつった笑顔を見せた。

六条は口を滑らせたことに気付きつつも、何も言わずに黙々と歩き

続けた。

しばらく歩くと、一人が同時に足を止める。

「…いますね…」

七弥はニユーナンブを構えた。

「…みたいね…」

六条はAK-47を構えた。

「…御明察…」

真っ黒いコートに身を包み、両手にAR-15を持った男が、アッシュグレイの髪をなびかせ木の上から一人の目の前に降り立つた。

「…あんた…名前は？」

「…名前？…そんなもの…ガキの頃に棄てたさ…！」

男は一人目掛けてAR-15を乱射する。

二人はそれぞれ間一髪のところで木の裏に身を隠した。

無数の小銃弾を浴びて、木の幹が少しずつ削れしていく。やがて装填されている銃弾を撃ち尽くし、銃声が鳴り止んだ。

「…今だ！」

七弥が飛び出す。

「…ちょっと待つ…」

六条は止めようとしたが間に合わず、七弥は敵の前に姿を現せた。その七弥の目に飛び込んできたのは、こちらに向けてデザートマグロを握っている男の姿だった。

「…甘いなあ…」

男はニタアと笑い引き金を引く。

放たれた銃弾は七弥の左肩を貫通し、地面に突き刺さった。

「…くそつ！」

七弥はそのままの勢いで、六条の隠れる木の裏に入った。

「…だから待つてって言ったでしょ…！」

「おやおや、仲間割れかい？…それより…声が若いなあ…高校生…つてどこか？」

六条の背中を冷や汗が伝づ。

「ふつ…殺しがいがあるなあ…！」

男は懐から手榴弾を取り出し投げ付けた。それを六条がすかさず撃ち抜く。

手榴弾は男の目の前で炸裂した。

六条は残弾の少ないAK-47を抱えて飛び出す。だが、男の姿はない。

「…じ…見てる…」

六条は慌てて振り向く。男は冷たい表情で、六条の華奢な右の太股を撃つた。

「ぐああっ…！」

六条は崩れ落ちながらも、負けじと引き金を引いた。だが、六条の放つた弾丸は男を捉えることができず、全て暗い森へと消え去った。そして、最悪は重なる。

「六条！七弥！」

二人が聞き覚えのある声のした方を向いた。そこにはれい達が立っている。

「…れいさん…来ちゃダメだ…！」

「ほう…あれがれいってヤツか…あの田…イジメがいがありそうだな…」

れいへと歩を進める男の足を七弥が掴む。そしてその足に、持つていたサバイバルナイフを突き立てた。

「ぐ…雑魚が…調子に乗るなあッ…！」

男は七弥を蹴り飛ばすと、七弥の額にデザートイーグルの銃口を当てて、その弾倉が空になり、スライドが後ろに引かれっぱなしになるまで弾を撃ち込み続けた。

男は弾が切れたデザートイーグルを捨て、再びAR-15を構える。れい達の残弾も少なく、殺れなければ殺られるが、無駄弾を使えばどのみち後で殺られる運命となる。

ジリジリと距離が縮まってきたその時、草むらに息を潜めていた六条が、背後から男に飛び付き羽交い締めにした。

「早く撃てえ……享……」

六条が叫ぶ。

「……だけど……」

享一はたじろぐ。

「構うな！撃て！！」

享一は意を決したようにレミントンを構えた。だが、その銃口の先を見た六条は享一を叱る。

「頭なんか狙うな！こいつは避けやがる！！胸だ……胸を狙え！！」

今度は六条の意思を悟った男が叫び暴れる。

「……おいおい……自己犠牲精神か？……ふざけるなあ……雑魚共がよ

つてたかって……！」

拘束を振りほどかんとする男を六条が必死に押さえ込む。

「止めて……撃たないで享一……！」

れいが叫んだ。

「……早く……撃ちなさい……撃てえッ……！」

重たい銃声が森に響き渡り、二人は冷たい地面に転がった。

「……イヤ……そんな……イヤアアツ……！」

れいは泣き崩れた。

「何で撃つたのよ……他に何か方法は無かつたの！？」

四季が問いただす。

「止める！！一番辛いのは……享一だ……」

源三は唇を噛み締めた。

「……俺は……仲間を……殺した……」

享一は己の罪を悔いる。

しばらくの間、4人は言い表せぬ喪失感に包まれていた。

れいは、スパイダー、近江義光らとの激戦により仲間の多くを亡くした。

生き残ったのはれい、享一、源三、四季だけだ。死んでしまった五郎、千歳、万由、二村、八戸、六条、七弥の死体は回収されるところなく、あの場所に置いてきた。恐らくは、もうあの場所にはなく、どこかに捨てられただろう……。

生き残ったれいたちは、享一の昔の知り合いの隠れ家に行き、四人一緒にいると見つかる可能性が高くなるとれいが言い、享一と四季は各自の思う場所へ行き、源三はれいについて行くことになった。

いま、れいと源三はあるビルの屋上に来ている。

「3、2、1……」

ドガアアアアアン……！

爆音と共に、れいたちのいるビルから数メートル先のビルが崩壊した。

「これで残るのはあと一つか……」

「そうですね……あと一つです」

「源三……私についてこなくともいいんだぞ?」

「俺の居場所は貴方の隣しかありませんから、そんなことを言わないでください……」

「そうか……すまない、つまらないことを聞いて」

「いえ」

「よし、行くぞ！」

そう言つてれいたちは崩れたビルに背を向け歩き始めた。

れいたちが、わざとビルを崩壊させると言つ、極めて目立つことをしているのは、相手に向けてのメッセージを込めているからだ。いつかは貴様のとこへ行くぞ、と言うメッセージだ。

享一はれいたちと別れてからずつと一人の男を追つていた。その男の居場所を突き止めるために男と関係している者を片つ端から問い合わせて、殺している。結果として、それはれいたちと同じ様なことをしていた。

いま、享一はクナイを片手に、ツンツン髪で焼けた肌でアロハシャツを着ている男に問い合わせていた。

「お前は運び屋ベアーの頭だな？」

男は享一の後ろで首から鮮血を流しながら倒れている3人の男たちを見た。

まだ高校生であろう少年が三人も殺した後だと言つのに、冷静な口調で話しかけてくることに、男は少なからず嫌な予感がしていた。しかし、ポーカーフェイスを保つたまま男は口を開けた。

「… どうだが？」

「やはり逃げ延びていたか…」

「貴様、殺し屋れいの仲間か！？」

「そんなことはどうでもいいだろう。お前は俺の質問に答えろ。近江柳玄はどこにいる？」

「それを知つてどうするきだ……？」

「お前には関係ない。お前はただ答えればいい」

「誰が答えるか！ 調子に乗るなよ若造！！」

言い終わると同時に男は机に隠していた銃を取り出し、享一に向ける……はずだった。

享一は男が言い終わる直前に、手に持っていたクナイを男の頭に突き刺したのだ。

「ちつ！ また無駄足だったか。……？」

享一は男のものと思われるパソコンに目を向けた。そこには、「四日後の日が沈むとき紅丘病院、204号室にて RO」と書かれていた。

「RO？ ……！ 近江柳玄か！ やつと、やつと見つけたぞ……！」

享一の目に光が宿つた。鈍く、黒い光が。

四季はれいたちと離れてから享一と同じように近江一家と関係のある者たちを一人ずつ潰し、柳玄の居場所を捜していた。

四季の手には銃が握られている。その銃の銃口は白髪混じりの丸眼鏡をかけた初老の男に向けられていた。

「……なるほど、私を追っていたのは貴方でしたか。いまさら私になんの用があるのでしょうか？」

「情報屋ファンタム、貴方にお聞きしたいことがあります」

「なんでしょうか？」

悪魔で冷静に話を進める一人。しかし、二人が作りあげている雰囲気は決して穏やかではなかった。

「四季が銃を持っている時点で穏やかではないが……。

「近江柳玄の居場所を教えてください」

「……それは無理な相談ですな」

「そうですか……。ならば、死んでください」

そう言い四季は銃の引き金を引いた。

四季は男のパソコンで享一が見たのと同じ文面を見つけ、享一と

同じ考えに到つた。

「今日ですね」

「ああ、恐らく一之瀬君と四季も来るだろ?」

「ええ、逃がしてしまった社長たちは恐らく一人が始末したんでしょ?」

もうすぐ日が暮れるころ、れいと源三は、紅丘病院の前に来ていた。

「本当に此処にあの男はいるのでしょうか?」

「……いてくれなければ困る。行くぞ」

れいと源三は病院に足を踏み入れた。

病院の一階にある204号室、今田和明と書かれた表札が掛かっている。

「ここですね……」

れいと源三は204号室から出でているただならぬ気配を感じ、額に薄つすら汗を浮かべていた。そして、それと同時にこの部屋に捜していた男がいることを確信した。

「……入るぞ。用意しろ」 そう言つて、源三がコルトガバメントの砂漠迷彩モーテル、雪上迷彩モーテルを両手に持つのを確かめてからドアを開けた。

「近江柳玄だな。貴様の命を貰いに来た」

れいの目の前には腕に点滴と、もう一つなにかのチューブが付けられている老人の顔を見ると同時に言い放つた。源三はれいが喋りだすと同時に銃口を老人に向けていた。

「まあ、待て。お前たちが私の旧友を殺し回てる者だな?」

「……それがどうした?」 「……いやなに、死んで向こうで会つたときに奴らに教えてやろうと思つてな」 「遺言はそれだけか?」

「まあ待て。私は老い先短い、見逃してはくれないか?」

「それは無理だな」

そう答えたのはれいでも源三でもなかつた。声のしたドアの方に視線を向けると享一いた。四季も一緒に。

「……なぜ此処に来た？」　れいはわざわざ来るとわかつていたのに「人に質問した。

「ふん、どこにいようと俺の勝手だらう」

「お嬢様、私にやらせてください」

そう言い、四季がナイフを取り出した。

「いや駄目だ」

れいが四季からナイフを取り上げ、柳玄の首にあてた。

柳玄の首から一筋の血が流れる。

「れい、止める。お前の武器は俺たちだろ」

「ふふ、やはり君は優しいな一之瀬君」

そう言つてれいは柳玄の首を切つた。

「…………」

沈黙が数分続いた。れいが自らの手で人を殺した。それは本来あつてはならないことだ。少なくともれいの武器ある源三、享一、四季はそう思つてゐるはずだ。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

ゆつくり、はつきりとした口調で四季が口にした言葉。

「ああ、ダイジョブだ。さあ、帰ろう」

いつもと変わらない口調でれいが皆に言つた。しかし、その場にいた全員がれいが今にも泣き出しそうだと感じた。

「はい」

「…………」

「わかりました」

各々がれいの問ひに自分なりに答えた。

場所は変わつて、れいと源三が今使つてゐる隠れ家にれいたちは
来ている。

「さて、これで死んだ者の弔い合戦は終わりだ。これからお前たち
はどうする?」

「俺はこれからもれいさんについて行きますよ」

源三はなんのためらいもなく言い放つた。

「俺は……、すまないがお前たちと一緒に……」

「私も一人でどこかに行こうと思います。すいません」

「いや、それがいいと私も思つ。源三お前もどつかに行け。もう一
人でダイジョブだろ?」

「……れい、言つたる? 俺の居場所はもうお前の隣しかないって
……」

「……そうか。好きにするがいい」

「……はい」

「二人とも、もうこれで会うことはないだろ? が達者でな」

「ああ」

「ありがとうござります」

そう言い畢一と四季はれいたちがいる部屋を後にした。

「さて源三、どこに行くとするかな?」

「どこでもいいですよ。貴方の行くところに俺はついていきますよ

「そつか」

死後の世界があつたとして、
私はぜつたい天国にいけない。
そう言つて、

初めて人を殺した殺し屋は笑つたんだ。

24 オワリとハジマリ ポペ（後書き）

今まで読んでもくれでありますかどうありますかといつーー！

多分、新しい小説を書くと思つて読んでくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044m/>

bullets 独りの少女の弾丸たち

2011年2月25日12時12分発行